

松江市文化財調査報告書 第116集

平成20年度野間地区ため池等整備事業に伴う  
戸崎遺跡発掘調査報告書

2008年10月

松 江 市 教 育 委 員 会  
財団法人 松江市教育文化振興事業団

## 例　　言

1. 本書は、松江市教育委員会、財団法人松江市教育文化振興事業団が平成20年度に実施した、平成20年度野間地区ため池等整備事業に伴う戸崎遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、鳥根県松江県土整備事務所から依頼を受けて実施したものである。
3. 本発掘調査の現地調査期間は平成20年6月1日～平成20年7月25日、本書の作成期間は平成20年8月1日～平成20年9月30日である。
4. 本発掘調査で使用した基準点および水準点は、依頼者から提供を受けたものである。

5. 調査組織は下記のとおりである。

主体者	松江市教育委員会	教　育　長	福　島　律　子
事務局	松江市教育委員会	理　事	友　森　勉
		文化財課　課　長	吉　岡　弘　行
		タ　係　長	飯　塚　康　行
		タ　主　任	後　藤　哲　男

調査機関	財団法人松江市教育文化振興事業団	理　事　長	松　浦　正　敬
		専務理事	中　島　秀　夫
		事務局長	松　浦　克　司
		埋蔵文化財課　課　長	廣　江　眞　二
		タ　　課長補佐	錦　織　慶　樹
		タ　　調　査　員	江　川　幸　子（調査担当者）
		タ　　調査補助員	田　中　基　次・北　島　和　子

6. 現地調査においては、鳥根県教育委員会から調査指導をいただいた。
7. 調査の実施および報告書の作成にあたっては、下記の方々より多くなご指導、ご教示、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。（順不同・敬称略）  
内山律夫（鳥根県埋蔵文化財調査センター）、深澤芳樹（独立行政法人奈良文化財研究所）  
松近土木有限会社、藤井昌明、藤井廣志、秋山寿男、吉岡克教、古江公民館
8. 現地調査参加者は下記の方々である。（順不同・敬称略）  
細山信子、細田勇治、吉岡永子、角田ミヤ子、秦岡富士子、今村正人、今村邦子  
吉岡啓三郎、金森まゆみ、小川真由美

9. 本報告書の作成には下記の者が携わった。

- (遺物整理) 田中富士美、飯野正子、川谷珠美、北川美枝子、瀬川恭子  
田中（基）、江川
- (遺物実測) 藤原哲、江川
- (図面作成) 北島和子、瀬川恭子
- (写真撮影) [遺構] 田中（基）、江川  
[遺物] 江川

10. 本書の執筆は松江市教育委員会の指導のもとに、第1章を後藤哲男（松江市教育委員会）、その他を江川が行い、編集は江川がおこなった。

11. 本書で使用した遺構記号は以下のとおりである。

SI…縦穴住居跡、SB…掘立柱建物跡、SK…土坑、SD…溝、sd…遺構内の溝、  
SX…性格不明の遺構、P…ピット

12. 発掘調査時に作成した図面、写真および出土遺物は松江市教育委員会が保管している。



盛夏の戸崎遺跡

## 本文目次

第1章 調査に至る経緯 .....	1
第2章 位置と環境 .....	2
第3章 調査の記録 .....	4
第1節 調査の概要 .....	4
第2節 層序及びその特徴 .....	6
第3節 第1遺構面について .....	10
第4節 第2遺構面について .....	15
第4章 結語 .....	27
遺構観察表 .....	28
遺物観察表 .....	32
写真図版 .....	
報告書抄録 .....	



第1図 松江市位置図

## 挿図目次

第1図 松江市位置図	1	第16図 第1遺構面遺構内出土遺物実測図	14
第2図 開発予定地と戸崎遺跡の位置関係	1	第17図 加工段2 - 01検出状況図	15
第3図 周辺の地形及び遺跡分布図	3	第18図 溝2 - 01検出状況	16
第4図 調査前地形測量図	4	第19図 溝2 - 02検出状況	16
第5図 調査成果図	5	第20図 第2遺構面検出状況及び東壁土層図	17
第6図 トレントA出土遺物実測図	6	第21図 遺構平面図(1)	19
第7図 トレントB出土遺物実測図	6	第22図 遺構平面図(2)	20
第8図 喀褐色土層と第1遺構面出土遺物実測図	8	第23図 第2遺構面遺構内出土遺物実測図	21
第9図 溝褐色土層出土遺物実測図	8	第24図 土坑SK2 - 01検出状況図	22
第10図 褐色土層出土遺物実測図	8	第25図 土坑SK2 - 01出土遺物実測図	22
第11図 黒褐色土層出土遺物実測図	9	第26図 土坑SK2 - 02検出状況図	23
第12図 灰色粘質土層出土遺物実測図	9	第27図 性格不明の遺構SX2 - 01検出状況図	23
第13図 溝SD1 - 01検出状況	10	第28図 壁穴住居跡SI2 - 01と遺物出土状況図	24
第14図 第1遺構面検出状況及び東壁上層図	11	第29図 壁穴住居跡SI2 - 01出土遺物実測図	25
第15図 上坑等検出状況図	13	第30図 表探遺物実測図	26

## 図版目次

図版1 (上) 戸崎遺跡遠景	図版10 (上) 第2遺構面P2 - 167裏出土状況
(下) 戸崎遺跡調査前近景	(下) 東壁セクション全景
図版2 (上) 第1遺構面平面プラン検出状況	図版11 (上) 東壁セクション北側 (部分)
(下) 第1遺構面完掘状況	(下) 東壁セクション南側 (部分)
図版3 (上) 第1遺構面の土坑群	図版12 (上) 第2遺構面完掘状況
(下) 第1遺構面ピットP1 - 175	(下) 第2遺構面完掘状況
図版4 (上) 第2遺構面平面プラン検出状況	図版13 (上) 調査終了後全景
(下) 加工段2 - 01と周辺の平面プラン検出状況	(下) 地元の人々を対象とした遺跡の説明会
図版5 (上) 加工段2 - 01と周辺遺構完掘状況	図版14 出土遺物
(下) 溝2 - 01と溝2 - 02完掘状況	図版15 出土遺物
図版6 (上) 土坑2 - 01遺物出土状況	図版16 出土遺物
(下) 土坑2 - 01完掘状況	図版17 出土遺物
図版7 (上) 土坑2 - 02完掘状況	
(下) 性格不明の遺構SX2 - 01完掘状況	
図版8 (上) 壁穴住居跡SI2 - 01平面プラン検出状況	
(下) 壁穴住居跡SI2 - 02セクション	
図版9 (上) 壁穴住居跡SI2 - 01小部出土状況	
(下) 壁穴住居跡SI2 - 01完掘状況	

# 第1章 調査に至る経緯

調査地は、松江市上佐陀町に所在し、旧松江市と鹿島町の市町村境付近に位置しており、鹿島町佐太神社の南側、直線距離にして300mの場所である。

周辺の遺跡としては北の丘陵上に弥山古墳群（K75）が、南の丘陵上にM78古墳群（D604）が存在する。

平成17年度、鳥根県松江農林振興センター（現、鳥根県松江県土整備事務所）から野間地区ため池等整備事業予定地内における遺跡の有無照会があり、松江市教育委員会により分布及び試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、開発予定地より遺跡が発見され、その土地の字名から「戸崎遺跡」<sup>(注1)</sup>と命名、取り扱い協議を行った。

今回の整備事業は堤体及び取水施設の老朽化による、地域安全度の低下や水管管理労力の増大を解決させるため、ため池を改修する計画であるが、特に老朽化は著しく、堤体決壩による被害も懸念されることから、工事計画の変更が困難であり、事前に発掘調査を実施することとなった。

調査の実施期間は平成20年6月1日～平成20年7月25日である。

注1 「戸崎」という字名の読み方は、「とさき」「こざき」等複数存在するが、本書では「とさき」とする。



第2図 開発予定地と戸崎遺跡の位置関係

## 第2章 位置と環境

戸崎遺跡の所在地は、島根県松江市上佐陀町529番2、530番、531番である。

遺跡の西は小さな谷で、現在は堰きとめられて野間池が造られている。野間池は農業用水のため池で、遺跡の東に広がる田畠を潤している。遺跡から200m東には佐陀川が流れているが、これは江戸時代に造られた運河で宍道湖から日本海に向けて汽水が流れている。

現在の佐陀川の前身は奈良時代に編纂された『出雲国風土記』に記載されている「佐太川」である。「源は二つ。東の水の源は、島根郡の所謂多久川、是也。西の水の源は秋鹿の郡渡の村より出づ。二つの水合ひて、南に流れて佐太の水海に入る。即ち水海の周り七里。鰐有り。水海は入海に通る。潮の長さ一百五十歩、広さ一十歩」と記してあり、北東の講武平野を流れてきた多久川と佐陀本郷あたりから流れてきた2つの川が合流してきて本遺跡の東側では1つの川となり占志町付近まで広がっていった佐太の水海に流れ込んでいたというのである。鰐が捕れたそうである。

遺跡周辺は谷水や川水に恵まれ、川の幸にも恵まれ、程よい広さの耕地もあり、古来よりも住み心地が良い環境ではなかったかと思われる。

また、戸崎遺跡から北の低丘陵を1つ越えた場所には、出雲国二宮である佐太神社が鎮座している。その距離は直線にしてわずか300mである。古代からの信仰の中心地にとても近い場所でもあるのだ。

以上のような地理的、文化的環境にあることから周辺の遺跡の分布密度は非常に高い。代表的な遺跡について以下で簡略に記す。

縄文時代の代表的な遺跡としては、国指定史跡の佐太講武貝塚（第3図7）が有名で、ほかに北講武氏元遺跡（9）、堀部第1遺跡（10）など多数が知られている。

弥生時代前期では、環濠を伴う居住跡が発見された佐太前遺跡（3）や木棺墓が多数検出された堀部第1遺跡（10）が大規模な遺跡と知られ、中期では佐太前遺跡のほか、鵜灘山遺跡（8）、大勝間山城跡（19）で小規模な住居跡が確認されている。後期では南講武草田遺跡（11）から多量の土器が出土している。

古墳時代に入ても、前期古墳を中心とする奥才古墳群（15）の存在が際立ち、未調査のため全貌は不明だが鵜灘山古墳群（6）も大規模古墳が存在する古墳群として注目されている。

古墳時代中、後期に入ると出雲国の中心地は意宇平野周辺に移ってしまい、以前のような際立った遺跡は無くなるが、講武平野や上佐陀町の一部には条里の痕跡が残っている。このあたりは古代特に早い時期においては、松江市の中でも遺跡の量、質、規模ともに突出した地域といえる。

この周辺がまた歴史的に大きな脚光をあびたのは、中世末の戦国時代である。後の佐太神社宮司を世襲することになる朝山氏が出雲入りをし、最終的に芦山城（18）に拠ったのである。その後、佐太神社の神領を侵そうとした海老山城（20）の地頭を滅ぼし、代わりに派遣された地頭が大勝間山城（19）を築いている。尼子復興戦の時代と入るとこのあたりは毛利と尼子の小競り合いの舞台となり、毛利が勝利した後は毛利家臣による所領分割の対象となっている。

江戸時代に入ると、清原太兵衛が運河佐陀川の開削を成し遂げた。現在の佐陀川周辺にはたくさんの人足が集められ、工事現場周辺で生活を営みながら労働に従事していたと思われる。芦山城の南麓に位置する清水遺跡（4）からは、12世紀頃の中国製青磁や白磁のほかに、17～18世紀の肥前系磁器が大量に出土している。



第3図 周辺の地形及び遺跡分布図 (1/25000)

- 1. 戸崎遺跡 2. 弥山古墳群 3. 佐太前道路 4. 清水遺跡 5. 多分塚田遺跡 6. 瀧瀬山古墳群 7. 佐太講武貝塚
- 8. 瀧瀬山遺跡 9. 北講武氏元遺跡 10. 堀部第1遺跡 11. 南講武草田遺跡 12. 南講武小畠第2遺跡
- 13. 南講武小畠遺跡 14. 南講武大日遺跡 15. 奥才古墳群 16. 昔美山古墳群 17. 稲寄遺跡 18. 芦山城跡
- 19. 大勝間山城跡 20. 海老山城跡 21. 高柳城跡 22. 佐太神社

## 第3章 調査の内容

### 第1節 調査の概要

調査区は南北35m、東西8mを測り、形状は南北方向に細長い短冊状である（第4図）。地形的には北端が標高6.3mと高く、南方に向かって緩やかに低くなり、北端と南端の比高は約1.8mを測る。現況は畑地であったが、南端付近では切土によって一段下がり、谷水が流れる素掘りの溝が掘られて湿地のような状況を呈していた。

調査方法としては、まず遺跡の性格を判断するために東壁に沿って幅60cmのトレンチA（第5図）を掘り、土層の堆積状況、出土遺物の時期、造構面の有無や深さ等の把握に努めた。ただし、南端部10m（切土以南）については廃土処理の都合上、約1ヶ月後に掘り下げをおこなった。また、調査区南側では西方に向けて傾斜して地形が下がっているため、西壁に沿ったトレンチBを掘り、東壁付近の層序と照らし合わせることにした。途中、湧水対策に東西方向の排水トレンチも掘り下げた。

トレンチAの上層堆積状況を観察すると、ほぼ自然堆積層であり、造構面は少なくとも2面が存在することが判明した。トレンチ調査で確認できなかった造構面の存在も否定はできないので、安定した層の上面では平面的に造構面の有無を確認することも課題とし、造構面2面について全面調査を実施することとした。なお、トレンチBは地山が浅く、地山上に褐色土層1層のみであった。層序はトレンチAとうまく整合せず、後世に削平を受けた状況であると判断した。

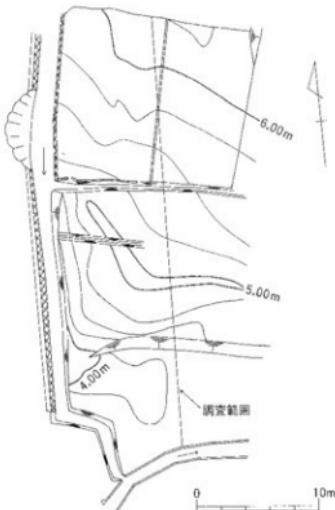
トレンチ調査で出土した遺物は、Aでは弥生時代中期末の壺口縁部（第6図1）から中・近世の土師質土器底部（7）石器（第6図8）と幅広い時期の遺物、Bでは平安時代の須恵器破片（第7図1・2）、中世の柱状高台（3）、中国製白磁片（4）があった。

次に、トレンチ調査の成果をふまえて面的調査にはいった。

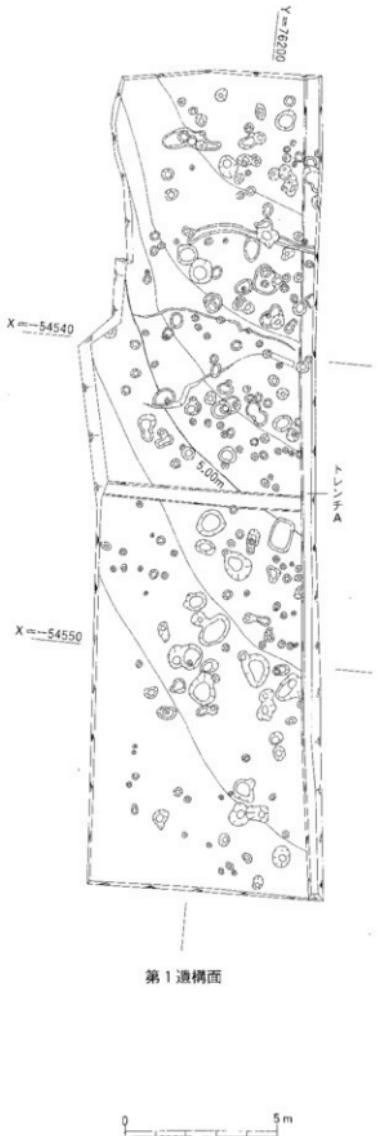
まず第1造構面まで掘り下げて精査をおこなった。第1造構面の存在する範囲は、南端の切土によって一段下がった湿地以外の場所である。ビットや土坑の平面プランを非常に高い密度で検出したが、基本的に全て半裁をおこない、埋上のセクションを観察して1/10縮尺で図面を取り、写真撮影をおこなった。その後、全掘をおこなって1/20縮尺で平面図を取り、完掘後の写真撮影をして第1造構面の調査を終了した。

その後、第1造構面からさらに下方へ掘り進めた。安定した層の上面では簡易な精査を実施して造構平面プランの有無を確認しながら、特に褐色土層上面では広範囲に精査を実施して掘り下げたが、新たな造構面を見つけることはできなかった。

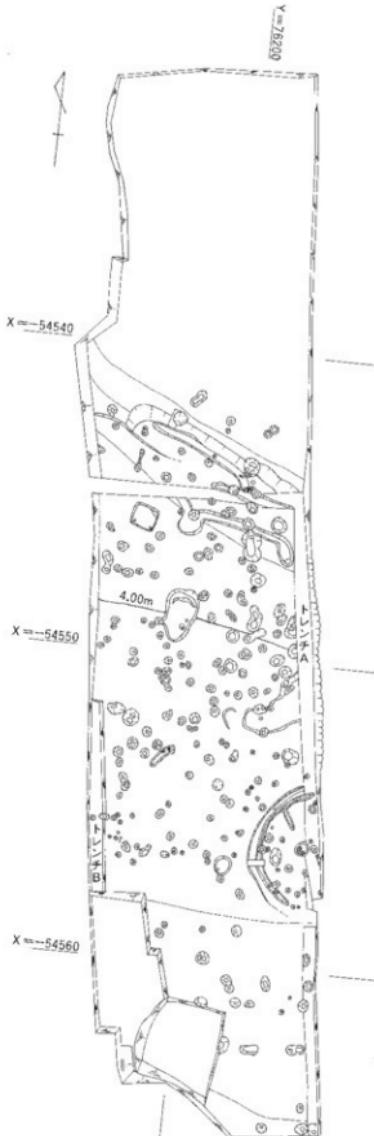
最後に、地山面に刻まれた第2造構面の調査を



第4図 調査前地形測量図



第1遺構面



第2遺構面

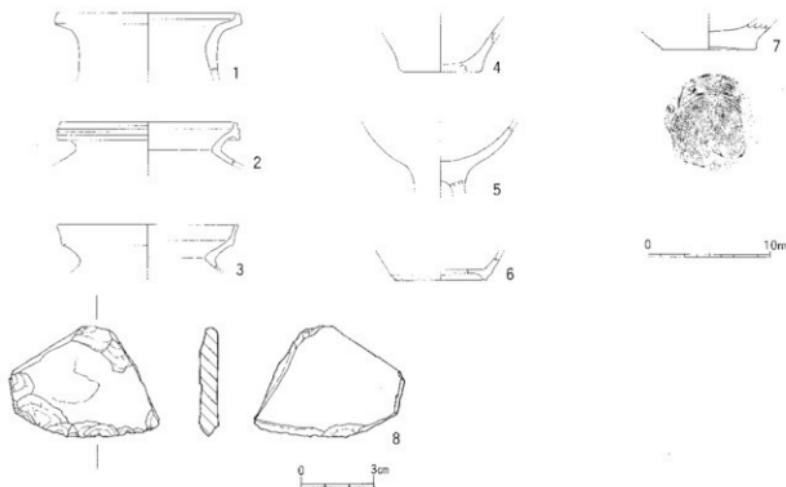
第5図 調査成果図

おこなった。第2遺構面が存在する範囲は、北端では第1遺構面と重複している事が考えられるので調査区全面である。第2遺構面でもまた非常に高い密度の遺構平面プランを検出した。第1遺構面と同様、基本的に全て半蔵をおこない、埋土のセクションを観察して1/10縮尺で図面を取り、写真撮影をおこなった。その後、全掘をおこなって遺物を作う遺構については1/10縮尺で図面を取り、その他の遺構については1/20縮尺で平面図を取り、完掘後の写真撮影をして第2遺構面の調査を終了した。また、調査区東壁のセクションを1/20縮尺で図面に取り、写真撮影をして現地調査全てを終了した。

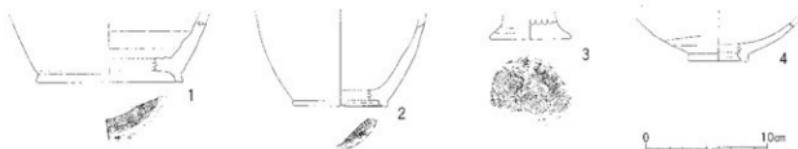
7月27日には、地元の人々を対象とした現地説明会を開催した。

## 第2節 層序及びその特徴

調査区は南北に長い傾斜地なので、層序は場所によって大きく違いが見られた。しかし、北端11m範囲（上区）、中央16m範囲（中区）、切土以南の南端8m範囲（下区）の各3区の中ではほぼ一貫した土層堆積状況を確認することができた（第14・20図）。したがって、区ごとに土層堆積状況を説明し、各層から出土した遺物や遺構面の存在等について記す。



第6図 トレンチA出土遺物実測図



第7図 トレンチB出土遺物実測図

### (1) 上区

薄い耕作土の直下が地山面である。耕作土中や地山直上面からは須恵器破片や土師質土器の破片が多数出土したほか、江戸時代初期の陶器皿が出土した。現代のタイルも出土している。地山面は第1遺構面であり、高密度の遺構平面プランを検出した。

### (2) 中区

地山自体が削平されて南下がりになっており、地山上の堆積土の厚さは最厚部で1.5mを測る。壁面崩落が著しく中央部分約4mは記録を残すことができなかつたが、全体に同じような層序を呈しているので、上層から下層へ説明を記す。

#### ①耕作土層

ふかふかした暗褐色土である。須恵器や土師質土器の破片が多数出土したが、耕作の影響を受けてほとんど微細な破片と化していた。

#### ②暗褐色土層

上記した耕作土が堅くしまった層である。出土遺物（第8図）には平安時代以降の須恵器片（1～4）、土師質土器の楕（5）、皿（6、7）、柱状高台（8）、須恵質の擂鉢（10）、砂目のある陶器皿（10）がある。砂目のある陶器皿が最も新しく江戸時代初頭であることから、この層は江戸時代初頭以降に堆積した層といえる。

#### ③濁褐色土層

この濁褐色土層の上面には多くの遺構平面プランが分布していた。上区から続く第1遺構面である。直上層②の出土遺物より、江戸時代初頭以降の遺構群であることは間違いない。出土遺物（第9図）には須恵器の平版破片（1）、中国製白磁碗破片（2）、用途不明の石製品破片（3）がある。この層の特徴は、土師質土器の破片がほとんど出土しなかつたことである。12世紀の中国製白磁碗が最も新しい遺物なので、12世紀以降に堆積した層である。

#### ④濁暗褐色土層

上区寄りの一部に見られる層である。遺物はほとんど出土しなかつた。

#### ⑤褐色土層

混じり物が少ないきれいな層である。この層の上面に遺構面が存在するのではないかと精査したが空振りに終わった。この層から出土した遺物（第10図）には、須恵器の甕片（1、2）、須恵器の坏片がある。最も新しい遺物は7世紀後半なので、それ以降の堆積層である。

#### ⑥黒褐色土層

炭や焼土塊、土器片を大量に含む層である。この層の下が第2遺構面の地山であることから、その遺構に伴う遺物包含層と考えてよいであろう。出土遺物には（第11図）、弥生土器の甕（1）、低脚坏の一部（5）、高坏の脚（6）、注口土器の把手（10）、土師器の甕（2～4）、高坏（7）、小形丸底甕（8、9）のほか、黒曜石製の刃器（13）、砥石（11）、擂棒状の石器（12）がある。土器の中で最も古いものは弥生時代中期末、最も新しいものは古墳時代前期なので、第2遺構面のおおよその時期が推測できた。

### (3) 下区

現代の切土が地山まで達しているため、北接する中区の土層との関連性は不明である。上層から下層へ説明を記す。

①褐灰色土層

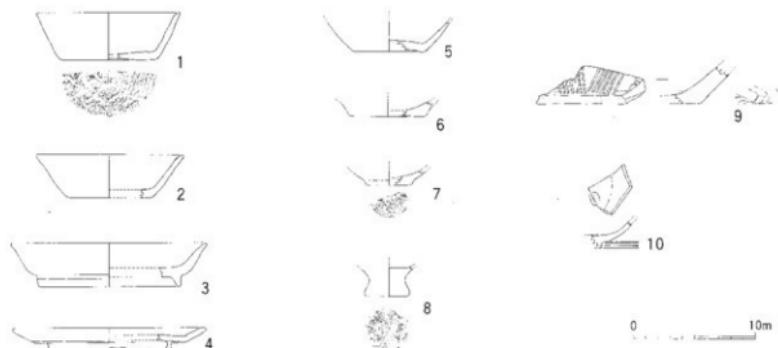
湿地の腐食臭がする層である。ナイロンが出土した。現代の層である。

②濁褐色土層

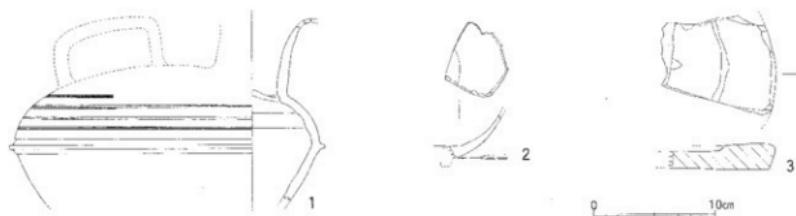
①層と同様ナイロンが出土した。現代の層である。

③灰色粘質土

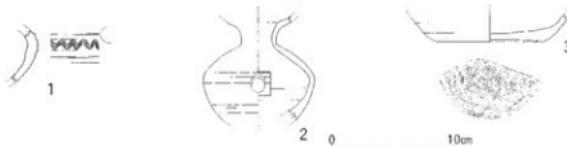
第2遺構面の地山直上層で、明らかに溝水して水面下で堆積した層である。出土遺物（第12図）は他の層に比べて大きめのものが多く、風化の度合いは少ない。土師器の高壺（1）、須恵器の壺（2～4）、柱状高台（5）などが出土した。最も新しいものは中世の柱状高台であることから、中世以降の堆積層である。ちなみに、灰色粘土層下の遺構面（地山）では、弥生時代中期の壺片（第23図8・9）伴うピットと古墳時代前期の壺（第23図7）を伴うピットを検出した。



第8図 暗褐色土層と第1遺構面出土遺物実測図

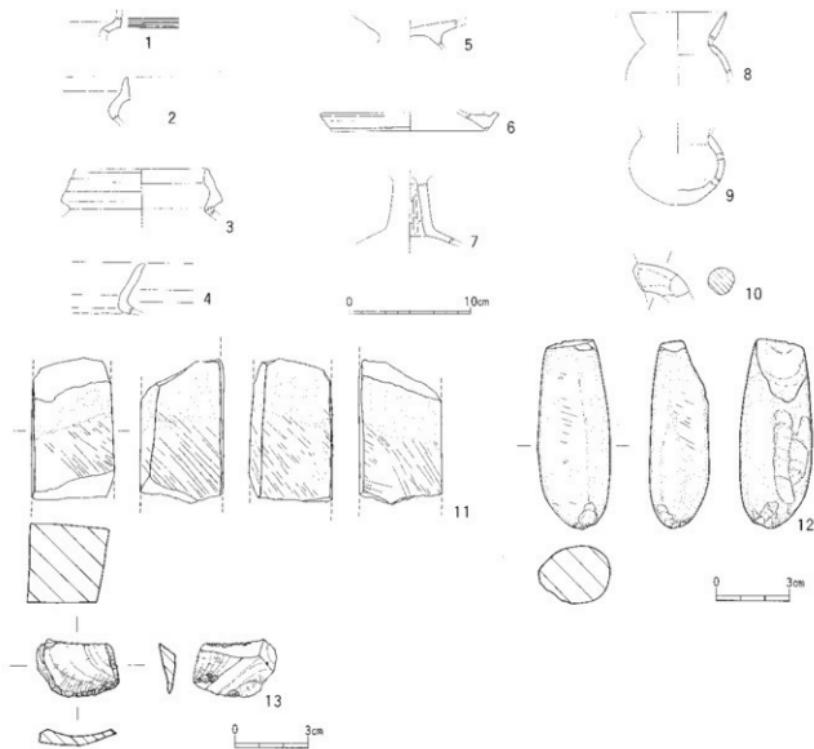


第9図 濁褐色土層出土遺物実測図

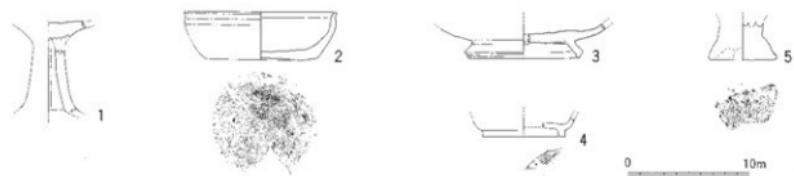


第10図 褐色土層出土遺物実測図

以上堆積土層について別に詳細を記してきたが、この遺跡の堆積土の特徴は、遺物は多量に含んでいても礫石がほとんど含まれていなかったことである。これは北方の低丘陵が切り開かれて利用された期間が多々あり、降雨のたびに細かい土が流れ込んで堆積した結果と考えられる。



第11図 黒褐色土層出土遺物実測図



第12図 灰色粘質土層出土遺物実測図

### 第3節 第1遺構面について

第1遺構面は、耕作直下もしくはその下の暗褐色土下で検出した。上区では地山面であり、中区では濁褐色土層上面である。ただし、下区は現代の切土によって地山まで削平されているため残存していない。第1遺構面の調査面積は234m<sup>2</sup>である。

地表面から浅いため耕作の影響も大きいと考えられるが、非常に高い密度で遺構を検出した。具体的には、ピット数210、溝1、土坑5である。以下で遺構ごとに詳細を記す。

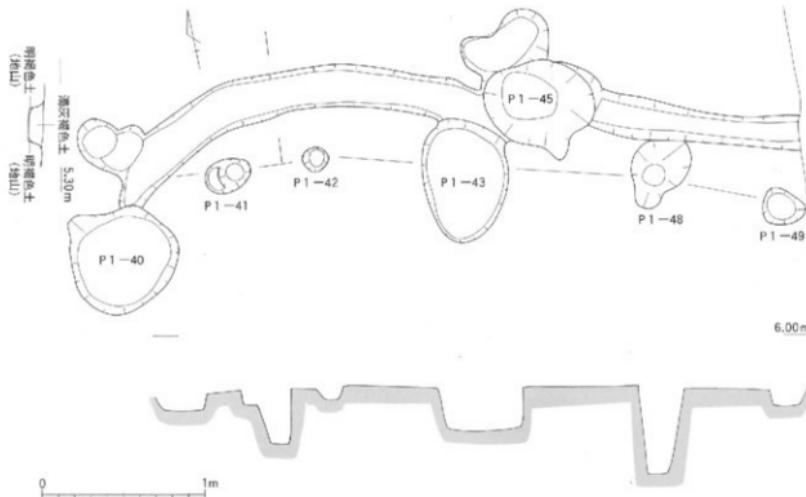
#### (1) ピット

ピットはそのほとんどについて半裁して埋土の観察をおこない、その詳細は後頁の「第1遺構面ピット観察表」に記載した。表中の「埋土の特徴」欄に記したとおり、柱が建っていた痕跡を残すセクションが多く存在し、P 1-175（第15図）などはピット検出面下30cmに柱を支えたと思われる扁平な石まで残っていた。しかし、同様のピットは検出できず単独の出土で終わってしまった。

ピット埋土中の出土遺物を観察すると、須恵器や土師質土器が多く出土しているようであるが、P 1-30では現代の磁器破片が出土しているのに対しP 1-56からは敲石（第16図6）が出土している。出土遺物は必ずしもそのピットが掘られた時期を示すものではないが、特に地山面に掘られたピットの中には第2遺構面と重複するものも存在するであろう。ピットの時期幅は広いと推察される。かつて握立柱建物が建っていたであろうことは間違いないが、現地でも図面上でもその復原を試みたが確実なものは見出せなかった。ここではピット観察表を提示しておくにとどめたい。

#### (2) 溝SD 1-01（第13図）

地山面に掘られた1条の溝である。東の調査区外に延びているため全長は不明であるが、検出長は4.3mで西端では若干南に曲がっている。上端幅25~30cm、深さ10cmを測り、埋土は濁灰褐色土で遺物は出土しなかった。時期は不明である。



第13図 溝SD 1-01検出状況



第14図 第1 遺構面検出状況及び東壁土層図

この溝の性格は、その形状から斜面に建てられた掘立柱建物の山手側の排水溝と考えられる。そこで掘立柱建物の復原を試みたが、山手側の柱列候補は存在するが断定できるものとはいえない。また、それに対応する南側の柱穴も見当たらない。それらしい位置関係のものも存在はするが、P 1-16は深さ79cm、P 1-52は深さ50cmと深さの面で対応させることができない。この溝の南側に、いつの時代か雨水を避けたい施設があったのであろう。

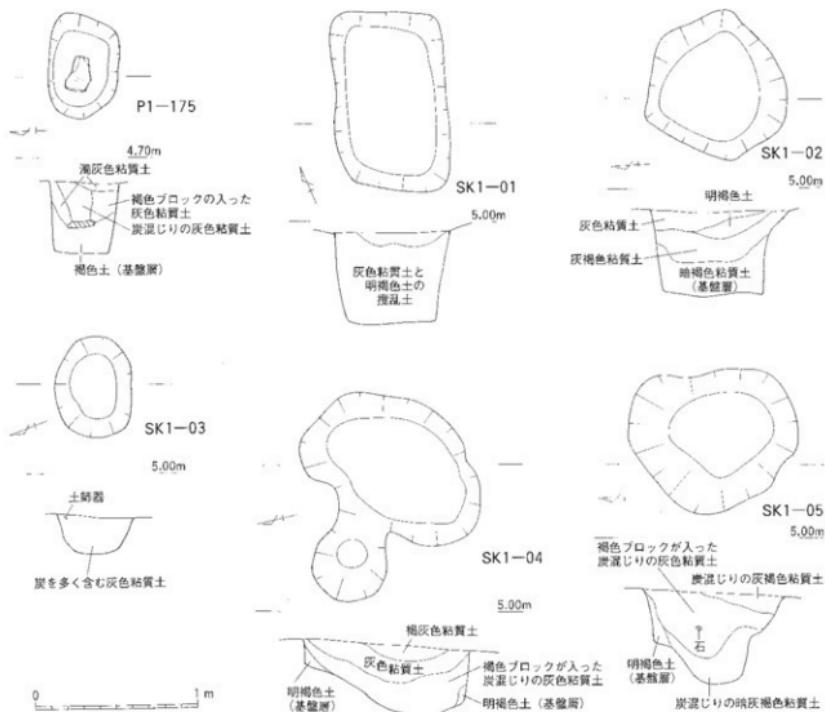
### (3) 土坑 (第15図)

土坑は調査区の南側の湯褐色上に上面で5基検出した。

#### ①SK 1-01

縦115cm、横70cm、深さ55cmを測る、平面プラン隅丸方形の土坑である。埋土は上層の一部に灰色粘質土、その下が灰色粘質土と明褐色土の搅乱土となっている。この搅乱土の中から、土師器(第16図3)、土師質土器片多数と肥前陶器の皿(第16図1)、片口鉢破片(2)が出土した。

肥前陶器皿は縁溝のある灰釉皿で、口縁の約半周強を欠損している。見込みには大胆な砂目があり、底部周辺には細砂が付着している。外面の下半分から高台にかけては露胎である。見込みの一部にも露胎がある粗雑なつくりで、17世紀初頭から半ばにかけて焼かれたものである。片口鉢は口縁が玉縁状



第15図 土坑等検出状況図

に作られている。注口部分までしか出土しなかったので、断定はできないが前記した皿とはほぼ同時期か若干新しいものかもしれない。

皿の残存状況が比較的良好であったことから、17世紀半ばかそれ以降に掘られたごみ捨て土坑の可能性が高いと考える。

②SK 1-02

直径85cm、深さ30cmを測る、平面プラン不整形な円形の土坑である。埋土は上から灰色粘質土、明褐色土、灰褐色粘質土となっている。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

③SK 1-03

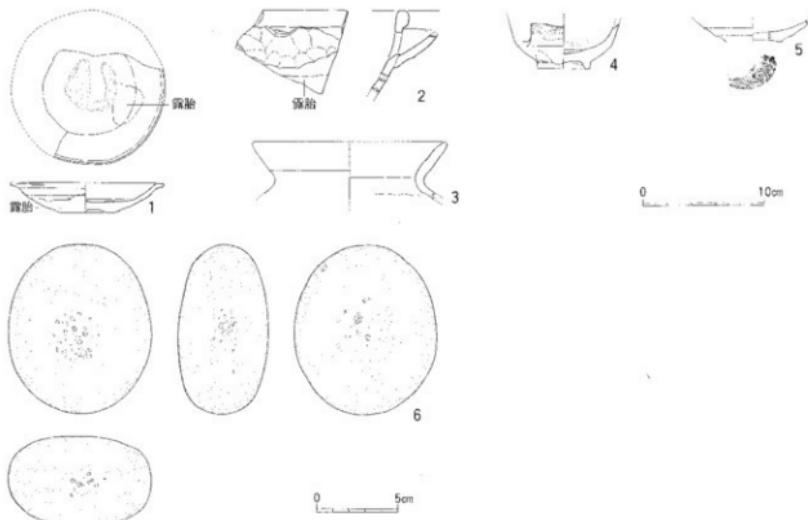
長径63cm、短径45cm、深さ25cmを測る、平面プラン楕円形の土坑である。埋土は炭を多く含む灰色粘質土層1層で、土師器の小さい破片が1片出土したが、時期は不明である。

④SK 1-04

長径120cm、短径75cm、深さ45cmを測る、平面プラン楕円形の土坑である。埋土は上から褐灰色粘質土、灰色粘質土、炭混じりの灰色粘質土となっている。灰色粘質土中からは須恵器破片、土師質土器破片のほか、肥前陶器の碗破片（第16図4）が出土した。陶器碗は白土の崩毛口文が施されたもので、高台周辺は露胎となっている。17世紀半ばから末にかけて作られたもので、この土坑は17世紀半ば以降に掘られたものといえる。

⑤SK 1-05

直径95~100cm、深さ56cmを測る、不整形な円形の土坑である。埋土は上から炭混じりの灰褐色粘質土、石を含む褐色ブロックが入った灰色粘質土、炭混じりの暗灰色粘質土となっている。少なくとも4個体分以上の土師質土器の皿破片（第16図5）が出土した。時期は不明である。



第16図 第1遺構面遺構内出土遺物実測図

#### 第4節 第2遺構面について

第2遺構面は地山に刻まれた遺構面である。したがって、第1遺構面の地山面で検出した遺構の中に、第2遺構面の遺構が混在する可能性は非常に高い。しかし、ここでは第1遺構面をさらに掘り下げて新たに検出した第2遺構面についてのみ報告をおこなう。第2遺構面の総面積は290m<sup>2</sup>、新たに検出した第2遺構面の調査面積はその内192m<sup>2</sup>である。

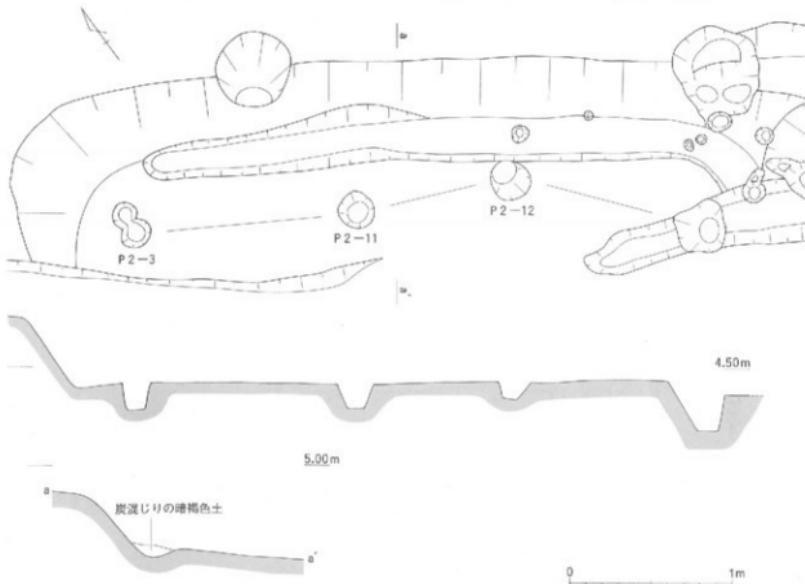
遺構の検出密度は非常に高く、具体的にはピット数181、溝2（加工段に伴うものを除く）、加工段1、土坑2、性格不明の遺構1、堅穴住居跡1がある。トレンチAや遺構面直上の黒褐色土層から弥生時代中期末～古墳時代前期末の遺物が出上したので、第2遺構面の遺構にはその範囲の時期幅が存在すると想定された。以下で遺構ごとに詳細を記す。

##### （1）加工段

###### ①加工段2-01（第17図）

標高が高い北側の地山を約40cm削って平坦面を造り出した加工段である。南西のわずかな段差や溝SD01などによって切られているが、東西幅は上端で5.0m（復原値）、床面で4.3mを測る。北壁沿いには幅30cm弱、深さ約8cmの排水溝が掘られており、その溝は西側では西壁直前で直線のまま終わり、東側では東壁に沿って弧を描き南方向にカーブしている。東方からのみの排水を考えている。溝の埋土は炭混じりの暗褐色土で、遺物は出土しなかった。

次に加工段の南側平坦面の建物復原を試みた。4つのピットが柱穴候補として考えられ、東西3間の建物が復原できるが、ピットとはいずれも直径25cm前後、深さ20cm程度と心もとないものばかりで、配列も直線とはかけ離れたゆがんだラインを呈していた。これらのピットに対応する南側のピットを



第17図 加工段2-01検出状況図

探したが検出できなかった。時期については、床面付近から風化が進んだ小さな素焼きの土器破片1点が出土したが、弥生土器と土師器の区別さえつかないものであった。加工段2-01とそれに伴う建物の時期は不明である。

## (2) 溝

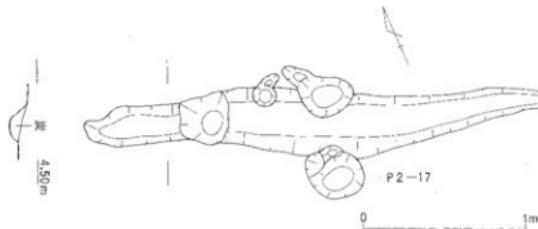
### ①溝SD 2-01 (第18図)

加工段2-01を切って掘られたもので、長さ2.9m、最大幅40cm、深さ8cmを測る。この溝は埋土の代わりに炭がいっぱいに詰まっていたことが特徴で、形状から見ても排水を意識したものとは思われない。遺物は全く出土せず、性格不明の溝である。時期は不明である。

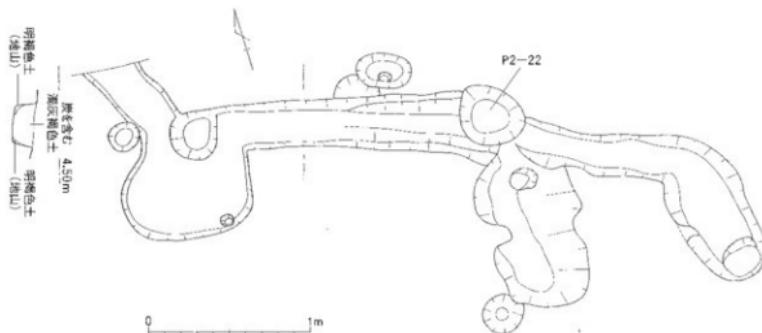
### ②溝SD 2-02 (第19図)

調査用の排水トレンチで切ってしまったが、標高の高い北から東南に下り、東方向に直線2mの地点で南東に折れて約1m伸び、さらに東方向1m先の地点でも南東に折れて0.8m伸びている。埋土はどこも炭を含む濁灰褐色土であったが、溝の延長または短縮といった作り変えがおこなわれた可能性がある。溝埋土から遺物は出土せず、時期は不明である。性格は排水溝と考えるのが無難であるが、近くに建物を構成するようなピット配列は見出せない。

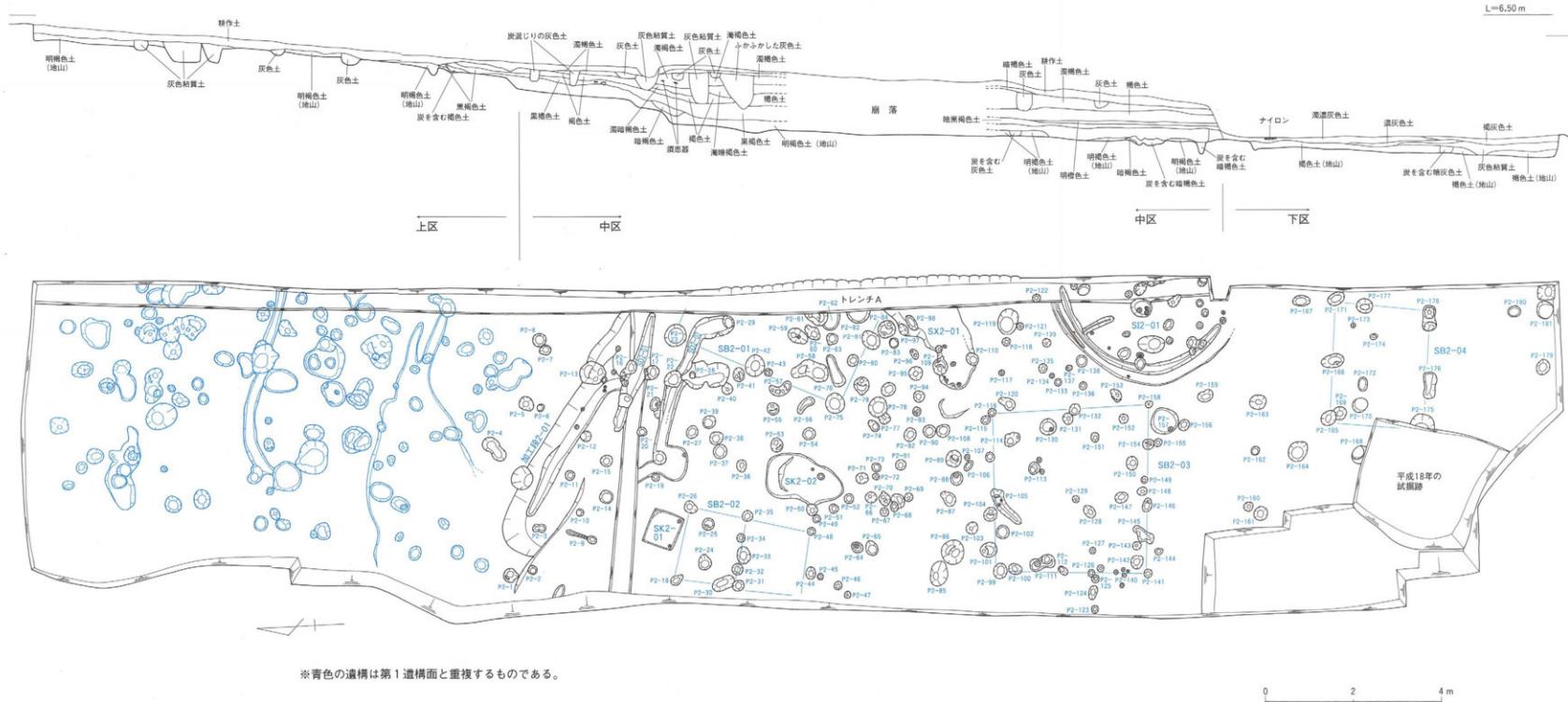
ちなみに、この溝と直接的関係はないのだが、溝を切っているピットP2-22からは土師質土器の壊破片(第23図12)が出土している。



第18図 溝SD 2-01検出状況



第19図 溝SD 2-02検出状況



第20図 第2構面検出状況及び東壁土層図

### (3) ピット

ピットはそのほとんどについて半裁して埋上の観察をおこない、その詳細は後頁の「第2遺構面ピット観察表」に記載した。ここでも柱根の痕跡を残すセクションが多く、ピットの分布状況図を見るとピット配置に方向性を見出すことができた。この場所で多くの掘立柱建物が建てられたことは間違いない。しかし、確実に建物を構成する、整然としたピット配列は見つからない。若干強引ではあるが、加工段2-01以外に4棟の掘立柱建物を復原したので以下で記す。

#### ①掘立柱建物SB 2-01（第21図）

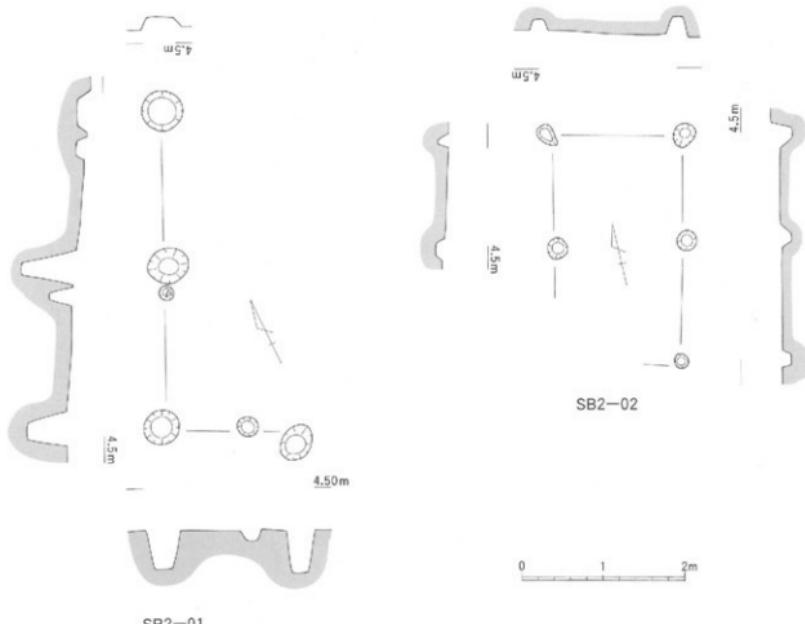
調査区ほぼ中央東寄りで、周囲のピットと比較して直径40cm前後、深さ60~70cmを測る。サイズ的に際立つピット3ヶ所を検出した。この3ピットは、東西方向の2ピットが心々距離1.8m、その2ピットトラインから直角に曲がって北方向に心々距離2.0mでもう1ピットが存在している。そしてさらに北方向に心々距離2.0mで直径50cmのピットが位置するが、これは深さ30cmと浅い。同一建物を構成するものか否か疑問は残るが、配列的に問題がないので候補としてあげておく。

遺物は全く出土せず、時期は不明である。

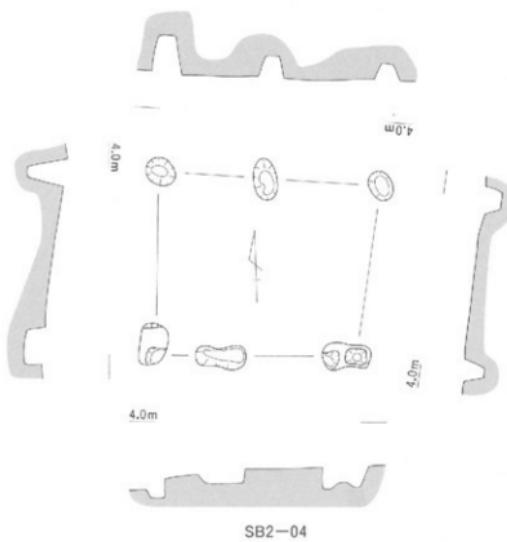
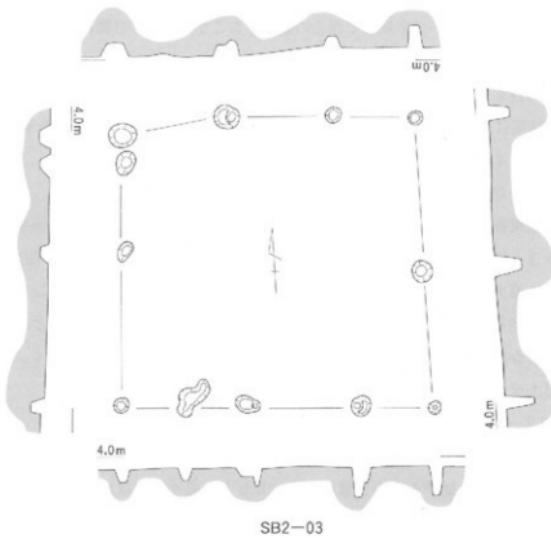
#### ②掘立柱建物SB 2-02（第21図）

掘立柱建物SB 2-01の西にあたる。いずれも直径30cm弱、深さ20cmと心もとない5ピットによる構成で、西側の調査区外に延びるものと思われる。ピットの心々距離は1.4m前後を測る。

遺物は全く出土せず、時期は不明である。



第21図 遺構平面図（1）



第22図 遺構平面図（2）

### ③掘立柱建物SB 2-03（第22図）

第1遺構面を掘り下げて検出した第2遺構面のほぼ中央である。この付近のピット群には、南北および東西方向のピットの方向性が存在する。しかし、整然とした掘立柱建物を復原することはできなかった。このSB 2-03は、図面上でかなり強引に復原したものである。

ピットがどれもやや小さめで浅いことは問題ないが、北辺と南辺のピット間心々距離が1.0m～1.3mと短いに対し、東辺と西辺のピット間心々距離が1.6m前後と長くなることには大きな疑問が残る。このあたりに、柱列が直線を成さない掘立柱建物が何棟も建てられていたのではないかという目安になればと思う。遺物は出土せず、時期は不明である。

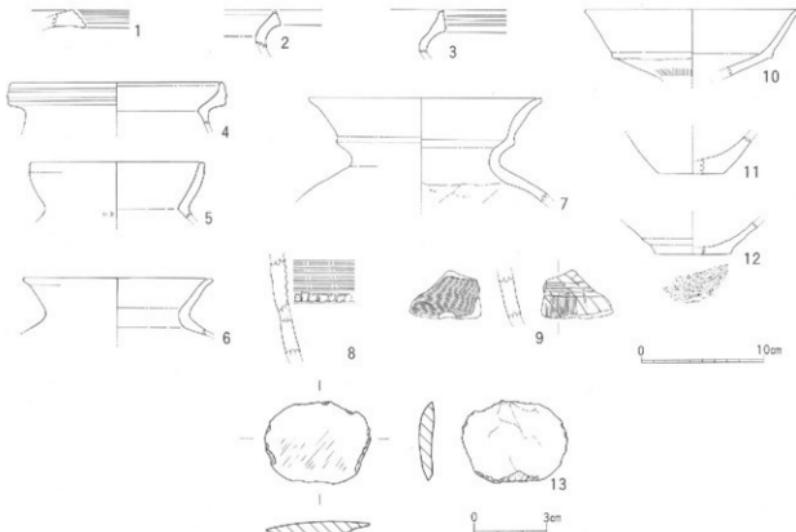
### ④掘立柱建物SB 2-04（第22図）

不整形ではあるが、ピット数の少ない調査区南端付近で直線上にならぶ等間隔の3ピットを検出したので、南側に位置するピットをやや強引に対応させて復原した1間×2間の掘立柱建物跡である。北辺の3ピットはピット間心々距離が1.4m、東、西辺はピット間心々距離が2.0m、南辺は西から1.2m、1.6mを測る。

遺物は、北西隅のピット埋土から弥生時代中期の壺破片（第23図9）が出土した。この壺破片は、外面が4条凹線を挟んで粗い格子目文のヘラ描き、内面が全面ハケメ調整である。

次に、時代のわかる遺物や形状のはっきりした遺物の出土したピットについて記す。もちろん、ピット埋土から出土した遺物は必ずしもそのピットが存在した時期を示すものではないが、情報量が少ない遺跡なので何かの参考になればと思う。

ピットP 2-25からは土器器の壺口縁部（第23図5）が出土した。単純口縁で、隣接する土坑SK 2-01との関連性が考えられる。ピットP 2-58からは弥生土器の壺口縁（第23図2）と底部（第23



第23図 第2遺構面遺構内出土遺物実測図

図11) が出土した。ピット P 2-79からは石器(第23図13)が出土した。磨製石斧が薄く剥離したような破片で、一部に押圧剥離を施して刃がつけられている。ピット P 2-95からは弥生土器の壺口縁部(第23図4)が出土した。後期の壺で、口縁端部には2条凹線が巡らされている。P 2-164からは土師器の高坏、坏部(第23図10)が出土した。外面に段が付くものである。P 2-167からは、土師器の壺(第23図7・図版10上)の大きな破片が出土した。このピットは柱穴として利用されたものではないかもしれない。P 2-181からは弥生時代中期の壺片(第23図8)が出土した。突出度の少ない多条突帯文の下に円形を意識した浮文が連ねられている。

#### (4) 土坑

土坑は2基検出した。

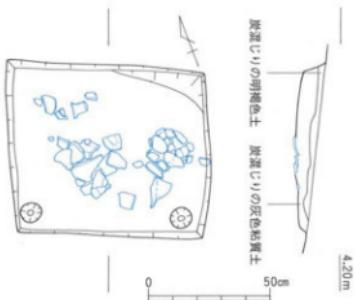
##### ①土坑SK 2-01(第24図)

形状は幾何学的な四角形で、上端で東西80~85cm、南北70~72cm、床面で東西74~78cm、南北64~66cm、検出時の深さ10cmを測る。各辺とも垂直を意識して掘り下げられ、床面は平坦である。床面の東南隅と西南隅に直径9cmの小ピットがあり、この小ピットは深さ10cm強で断面が先細りであることから杭跡と判断された。

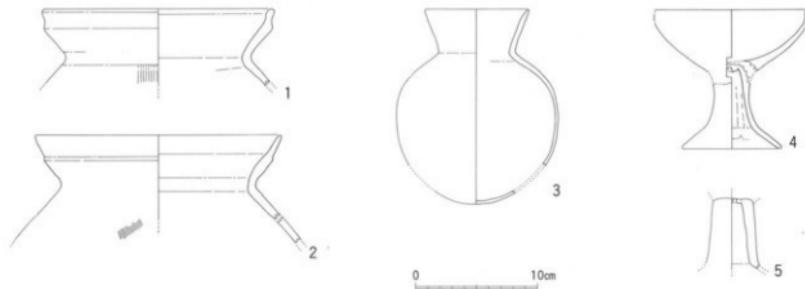
遺物は、丸底壺が横たわった状態で上からの土圧で押し潰されたように出土したほか、高坏ほぼ1個体分、高坏の脚、壺破片が床面直上から出土した。丸底壺の出土状況からも、使用されていた当時

の状態に近いものと推察されるが、どれも器面の風化が著しく、取り上げ不可能な破片が多かった。埋土は上から炭混じりの明褐色土、炭混じりの灰色粘質土である。

第25図は出土遺物の実測図である。1、2は退化した二重口縁の壺で、3は完形で出土した中型の丸底壺、4、5は高坏である。これらの遺物より、この土坑が存在した時期は古墳時代前期末といえる。



第24図 土坑SK 2-01検出状況図



第25図 土坑SK 2-01出土遺物実測図

## ②土坑SK 2-02（第26図）

不整形な瓢箪のような形状を呈し、上端は長軸1.8m、短軸1.0m、検出時の深さ20cmを測る。床面は北寄りに約15cmの段があり、平坦部はあっても凹凸が目立つ粗雑な造りである。埋土は上から褐色ブロックを含む炭混じりの濁灰褐色土、炭混じりの濁灰褐色土で、一部その間に褐色土を挟んでいる。

遺物は、微小な土器片に混じて弥生時代後期の甕片（第23図3）1点が出土した。しかし、破片が小さすぎるため、確実に遺構に伴うものとはいえない。

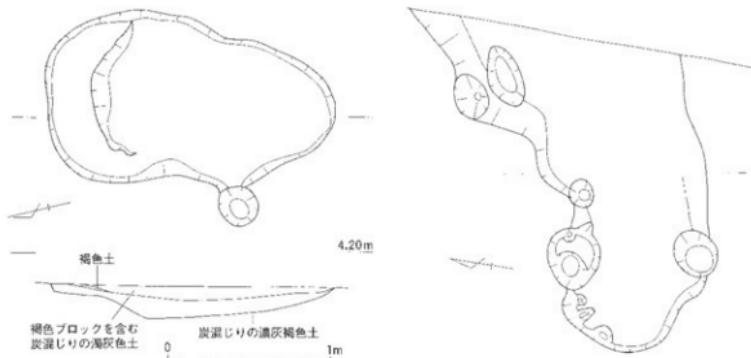
弥生時代後期の可能性が考えられる、性格不明の土坑である。

### （5）性格不明の遺構SX 2-01（第27図）

地山の掘り下げが無秩序で範囲が広く、用途の想像が出来ないため、性格不明の遺構として扱う。調査区外に延びているため全体の形状は不明だが、検出範囲での上端の法量は東西1.9m、東壁で幅2.7m、検出時の深さ17cmを測る。床面は凹凸が著しい。

この遺構の特徴は、非常に多くの炭が出土したことである。セクションは上から炭層、炭を非常に多く含む黒褐色土、炭層である。しかし、遺構面に焼土が見られなかったことから、火を使用した場所は調査区外もしくは北方の既に削平を受けた場所であったと思われる。

遺物は、風化が著しい微小な土器片が10数点出土したが、時期判別できるものは無く、取り上げも不可能であった。時期、性格ともに不明の遺構である。

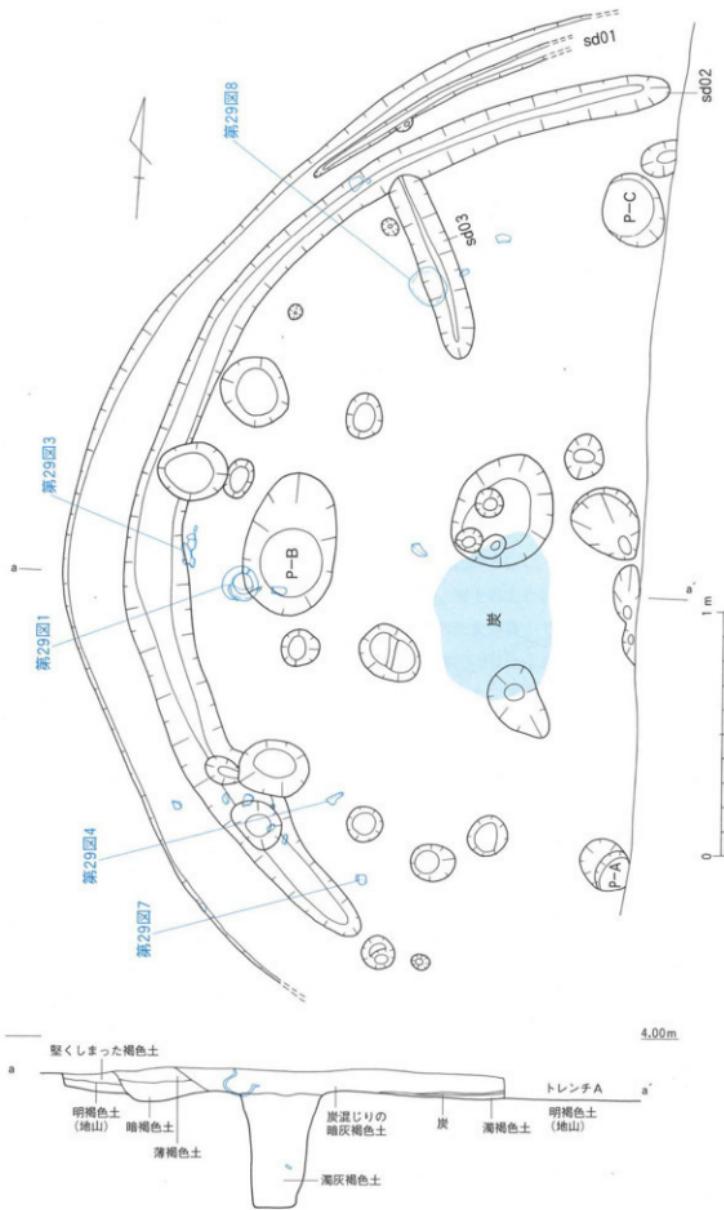


第26図 土坑SK 2-02検出状況図



第27図 性格不明の遺構SX 2-01検出状況図

第28図 墓穴生層跡SI2-01と遺物出土状況図



(6) 壺穴住居跡SI 2-01 (第28図)

標高3.8mで円形の壺穴住居跡半分の平面プランを検出した。半分は東の調査区外に埋もれたままである。後世の削平の影響が大きく、南側では平面プランの輪郭が消滅していた。この壺穴住居跡は、溝の数や位置、そしてセクションで見られる堅くしまった褐色土の存在から、最低1回は建て替えられていることが判明した。

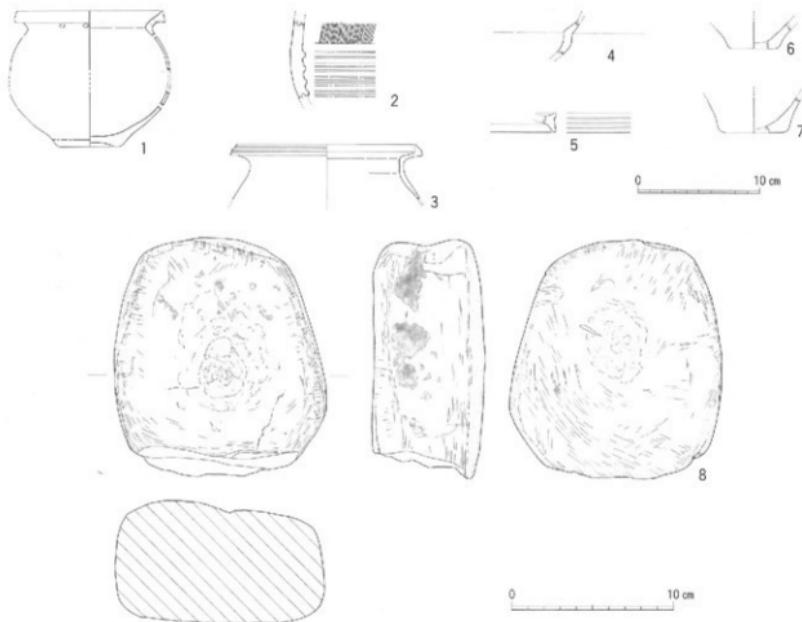
まず、旧住居跡について記す。

平面プランで検出した外郭が旧壺穴住居跡の範囲で、復原直径4.6mを測る円形壺穴住居跡である。壁に沿って巡らされた溝の一部が、北方で幅の狭い浅い溝 (sd01) となって残っていた。床面は溝sd01検出面よりもさらに高いレベルにあったと思われる。旧住居跡に伴う遺物は出土しなかったが、遺構埋土中から出土した壺頭部破片 (第29図2) は、建て替え後の床面から出土した土器群より若干古いタイプで弥生時代中期末であった。これが旧住居跡の時期を示す遺物となるかもしれない。

次に建て替え後の住居跡について記す。

旧住居跡の壁面から12~22cm入ったところに幅16~26cm、深さ6cmの溝が巡らされていた。この溝sd02が建て替え後の壁面に沿った溝である。何故か床面積を減らした建て替えで、復原直径4.0mの円形壺穴住居となっている。小型である。

床面には中央から北北東方向に長さ約1m、深さ7cmの直線的な溝sd03が掘られて周溝と合流している。建物内ではたくさんのピットを検出したが、深さ32cmのP-A、深さ47cmのP-B、深さ42cm



第29図 壺穴住居跡SI 2-01出土遺物実測図

のP-Cが主柱穴と考えられる。P-AとP-B間の心々距離は1.9m、P-BとP-C間の心々距離は2.0mを測る。ほかにも深さ10~20cmの浅いピットが多く散在していたので、それらの中に旧住居跡の柱穴に当たるものが存在すると思われる。

床面の中央よりやや西寄りに炭が散乱していたが、明確な中央ピットは検出されなかった。

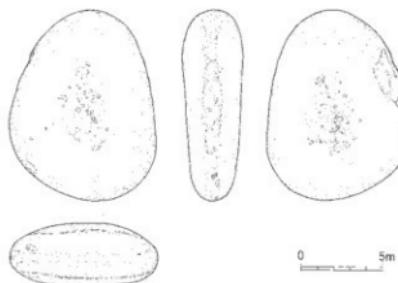
遺物としては、P-Bの柱に添うように小型の壺（第29図1）が床面直上から完形で出土した。口縁端と頭部の間に蓋を固定するための孔が2ヶ所穿たれたもので、原位置を保つものと考えられる。その他の床面直上から出土した土器はいずれも小片であるが、甕（第29図3）や高杯（第29図4・5）があり、時期は弥生時代中期末～後期初頭で、若干後期初頭の色が濃いと思われる。

土器のほかには、石皿（第29図8）が出上した。石皿としては小型品である。ほぼ全面に擦痕が見られ、両側面の中央が窪んでいる。あちこちに漆状の付着物が見られるが、化学分析をしていないので断言はできない。

以上のことから、ここで検出した堅穴住居跡は弥生時代中期末に建てられ、最低1回の建て替えを経て、弥生時代後期初頭には放棄されたことがわかった。

#### ※ 表採遺物

第30図は周辺の畑の隅に転がっていた敲石である。参考資料として掲載しておく。



第30図 表採遺物実測図

## 第4章 結語

奈良時代に編纂された『出雲国風土記』から戸崎遺跡周辺を復原すると、「講武平野と佐陀本郷あたりに源を發する2本の川が合流して佐太河となり、水量を増しながら戸崎遺跡の東側の低地を南に流れ、古志町まで広がっていたとされる佐太の水海に注ぎ、さらに穴道湖に流れ込んでいる。また、神名火山、朝日山の東麓には佐太御子社（佐太神社）が鎮座している。」といったところであろうか。

佐陀川の描写についてはかなり時代を遡ることができるであろう。佐太神社がいつ頃祀られるようになったのかは定かでないが、朝日山北麓の志谷奥遺跡では銅剣と銅鐸が埋納されており、弥生時代にはその前身となるものが存在していたのかもしれない。

戸崎遺跡はそんな風景の片隅に存在してきたのである。

人々が綿々と住まいしてきたであろうことは想像に難くない。発掘調査を実施した結果、時期幅の広いたくさんの遺物が出土し、遺構面は2面を検出した。

最も古い遺物は弥生時代中期の壺の小破片で、数点がピットの中から出土した。

弥生時代中期になると、人々がここに円形堅穴住居を建てて生活を営んでいたことがわかった。穏やかな川や水海から豊かな恵みを受けながら、小さな谷の低湿地ではきっと稻作もおこなっていたであろう。しかし、どういった事情かはわからないが、堅穴住居の床面を若干深くして床面積を減らすという、建物の建て替えをおこなっている。そして、その堅穴住居も弥生時代後期初頭には打ち捨てられていた。

弥生時代後期になると、わずかな遺物が加工段2-01の肩付近から出土したが、遺構と結びつけることはできなかった。

古墳時代前期末の遺物を伴う遺構は比較的多かった。中でも土坑SK2-01は平面プランが四角形を呈する珍しい遺構であった。床面2ヶ所に杭が打たれた痕跡があり、覆屋を支える支柱が存在したことを示すとさせる。中には壺、壺、高杯が入っていたことより、生活に密着した収蔵庫として利用されていたと考えられる。周辺に存在した多数のピットから人々が居住した掘立柱建物が復原できるはずであるが、既然と並ぶ柱穴列は見つからず、本文中ではかなり強引な復原をおこなっている。以上が第2遺構面である。

古墳時代前期末を過ぎると、人々は戸崎遺跡から去って行き、この地には土砂がゆっくりと自然堆積している。調査区南端は水面下に沈んだ時期もあったようである。

しかし、この周辺で人間の活動が途絶えることは無かった。堆積層の下層からは、古墳時代後期の甕2点が出土した。北側の丘陵上には弥山古墳群が築かれ、南の丘陵上にも古墳が築かれているのである。平安時代から中世にかけては、戸崎遺跡より若干標高が高い場所、具体的には現在の向陽台団地あたりに再び人々が居住していたらしい。調査区内に遺構面が無く、戸崎遺跡堆積土中からその時期の生活に密接した土器小片が多量に出土したことから推察されるものである。

江戸時代初頭に入ると、またここで人々が土坑を掘ったり建物を建てたりと活動を開始している。第1遺構面である。陶器器類など生活に密着した遺物の出土量が少なかったことから、居住地の中心部からは遠く離れた場所、または農地の一端の作業小屋が建てられたような場所ではなかつたかと考えられる。江戸時代初頭以降の近世遺物は出土せず、現代の畠地に至るまで、この場所がどのような歴史をたどってきたのかはわからない。

ピット観察表(第1遺構面)

ピット番号	上部幅(cm)	下部幅(cm)	深さ(cm)	洋面上の特徴	洋面上に存在する物	備考
1-01	24	19	9			
1-02	24	10	36	セクションに柱根が存在した痕跡有り		
1-03	31	25	18	セクションに柱根が存在した痕跡有り		
1-04	38	10	30	柱根が存在した痕跡有り		
1-05	41	5	28	セクションに柱根が存在した痕跡有り		
1-06	58	45	17		洋面上諸もしくはナショナル	
1-07	34	25	24	セクションに柱根が存在した痕跡有り		
1-08	33	16	25			
1-09	15	9	31			
1-10	92	23	50			
1-11	31	15	48			
1-12	25	39	37	セクションに柱根が存在した痕跡有り		
1-13	29	24	37			
1-14	26	29	34			
1-15	15	5	11			
1-16	60	25	19	セクションに柱根が存在した痕跡有り		
1-17	33	73	40			
1-18	41	26	33	セクションに柱根が存在した痕跡有り		
1-19	15	8	11			
1-20	20	25	25	セクションに柱根が存在した痕跡有り		
1-21	18	11	21	セクションに柱根が存在した痕跡有り		
1-22	25	20	9			
1-23	35	26	39			
1-24	33	20	67	セクションに柱根が存在した痕跡有り	東山Ⅱ 柱1片	
1-25	18	16	12			
1-26	23	29	12			
1-27	26	26	17		解説部(解説時代)	
1-28	33	10	29		土器筒土器1片	
1-29	51	10	50			
1-30	24	10	31		上縁裏上縁1片	
1-31	16	5	12			
1-32	30	21	25			
1-33	55	18	42	セクションに柱根が存在した痕跡有り	土器筒土器2片、現代包装1片	
1-34	43	34	16			
1-35	42	20	50			
1-36	27	21	17			
1-37	32	7	18	セクションに柱根が存在した痕跡有り		
1-38	15	10	23			
1-39	33	30	26			
1-40	62	50	38			
1-41	73	15	43			
1-42	15	9	8			
1-43	47	20	27	セクションに柱根が存在した痕跡有り		
1-44,45	39	21	70	セクションに柱根が存在した痕跡有り		
1-46	73	70	15			
1-47	15	8	10			
1-48	30	17	32			
1-49	20	15	16			
1-50	32	28	28	セクションに柱根が存在した痕跡有り		
1-51	70	30	47	セクションに柱根が存在した痕跡有り	土器筒土器(底)破片1片、土器筒土器小片18片、破壊部1片	
1-52	37	30	59	セクションに柱根が存在した痕跡有り		
1-53						
1-54	85	61	50	セクションに柱根が存在した痕跡有り	上縁裏上縁(底)破片	
1-55	22	15	49			
1-56	25	13	32	セクションに柱根が存在した痕跡有り	鐵石(第16開6)	
1-57	25	13	20	セクションに柱根が存在した痕跡有り		
1-58	65	40	46	セクションに柱根が存在した痕跡有り	土器筒土器小片2片	
1-59	38	22	50		瓦筒1片	
1-60	90	17	56			
1-61	45	25	30			
1-62	25	20	30			
1-63	40	35	16			
1-64	36	17	26			
1-65	46	29	18			
1-66	22	20	15			
1-67	18	7	11			
1-68	55	7	30			
1-69	45	45	25			
1-70	26	7	10			
1-71	16	5	7			
1-72	19	7	9		漆灰漆1片	
1-73	28	25	17			
1-74	23	19	35	セクションに柱根が存在した痕跡有り		
1-75	17	13	20			
1-76	17	10	22			
1-77	23	18	20			
1-78	30	25	43	セクションに柱根が存在した痕跡有り		
1-79	12	15				
1-80	55	25	40			
1-81	35	25	18			
1-82	30	26	90		鉄壓器1片	
1-83	65	60	15			
1-84	43	35	35	セクションに柱根が存在した痕跡有り	朱墨子器、青瓷器1片	

ピット名	上端深さ (cm)	下端深さ (cm)	底き れい (cm)	底上の特徴	埋土や山土層等	備考
1-85	45	22	52	セクションに柱根が存在した痕跡有り	酒山層2片(色山式)	
1-86	22	15	33			
1-87	15	13	16			
1-88	70	6	27			
1-89	32	23	14			
1-90	33	29	15			
1-91	36	25	43	セクションに柱根が存在した痕跡有り	上御賀上層(30)1片、酒泉層2片	
1-92	36	18	20			
1-93	25	20	47	セクションに柱根が存在した痕跡有り	酒泉層2片	
1-94	26	13	53			
1-95	15	8	16			
1-96	23	18	10			
1-99	26	15	8			
1-100	30	5	16			
1-101	26	18	39	セクションに柱根が存在した痕跡有り	上御賀1片	
1-102	27	11	34			
1-103	10	35	27	セクションに柱根が存在した痕跡有り	十頭賀十層(30)約1/3程度	
1-104	27	20	32		弓引上層1片、赤池層1片、十頭賀十層1片	
1-105	27	25	15		上御賀上層1片	
1-106	30	20	21			
1-107	30	17	37			
1-108	32	28	30			
1-109	30	17	20		御生上層1片、赤池層1片	
1-110	40	6	53	セクションに柱根が存在した痕跡有り	御生上層2片、酒泉層3片(内1片葉切の色)	
1-111	20	12	62			
1-112	40	22	43	セクションに柱根が存在した痕跡有り	御生上層1片、酒泉層4片(内1片葉切の色)	
1-113	24	14	38			
1-114	25	18	36	セクションに柱根が存在した痕跡有り	二頭賀土層3片	
1-115	24	15	38			
1-116	25	17	52	セクションに柱根が存在した痕跡有り		
1-117	23	13	21			
1-118	20	13	28			
1-119	28	12	35			
1-120	36	25	25			
1-121	27	20	25			
1-122	29	9	38			
1-123	30	18	38			
1-124	25	15	30		御生上層2片	
1-125	23	13	33			
1-126	20	9	17			
1-127	17	10	35			
1-128	27	15	26		御生層2片	
1-129	17	7	18			
1-130	20	15	24		上御賀土層2片	
1-131	25	13	9			
1-132	15	7	9			
1-133	40	10	14			
1-134	22	12	9			
1-135	15	7	13			
1-136	20	18	52			
1-137	19	11	9			
1-138	45	30	42	セクションに柱根が存在した痕跡有り		
1-139	25	15	37			
1-140	24	10	17			
1-141	27	18	26		上御賀上層2片	
1-142	45	13	65	セクションに柱根が存在した痕跡有り	赤池層1片、羽原層2片、上御賀上層2片、弓引上層1片、立ちこぼしきは土層等の礫石10枚	
1-143	74	15	67			
1-144	35	20	16			
1-145	60	33	65	セクションに柱根が存在した痕跡有り	十頭賀十層3片 「赤面(西側)」、酒泉層1片、十頭賀十層1片	
1-146	23	10	16		上御賀上層4片	
1-147	18	7	19			
1-148	16	13	19			
1-149	19	10	20			
1-150	18	12	20			
1-151	12	8	7		十頭賀十層1片	
1-152	29	17	21			
1-153	16	10	11			
1-154	45	38	5			
1-155	24	15	50	セクションに柱根が存在した痕跡有り	上御賀上層1片	
1-156	29	16	15	セクションに柱根が存在した痕跡有り	酒泉層1片、十頭賀十層2片	
1-157	18	18	45			
1-158	30	20	37			
1-159	22	14	33		酒泉層1片、十頭賀土層2片	
1-160	15	15	26		上御賀上層4片	
1-161	29	15	8			
1-162	18	5				
1-163	25	19	54			
1-164	18	17	38			
1-165	70	10	80	セクションに柱根が存在した痕跡有り	酒泉層4片、十頭賀十層1片	
1-166	21	24	45	セクションに柱根が存在した痕跡有り	酒泉層1片	
1-167	17	16	15			
1-168	25	12	15			
1-169	23	14	18		弓引上層1片	
1-170	39	14	19	セクションに柱根が存在した痕跡有り	小曾根赤層1片、十頭賀十層2片、時代地層1片	
1-171	26	8	33	セクションに柱根が存在した痕跡有り		

ピット 番 号	上端 高 (cm)	下端 高 (cm)	深さ (cm)	崖土の特徴	地 上 中 生 物	備 考
1-177	22	11	25		ナシ貝十個4片	
1-178	33	23	57		上脚質上層3片、海山貝3片	
1-179	30	10	18		須恵器4片、ナシ貝十個8片	
1-180	43	33	25	セクションに柱状が存在した痕跡有り	須恵器2片、上脚質上層3片	丸を定めたと思われる石塁などあり
1-181	30	17	4			
1-182	30	15	5			
1-183	53	15	51			
1-184	27	9	36			
1-185	112	70	42	セクションに柱状が存在した痕跡有り	須恵器1片、土中質土器2片	
1-186	24	12	15			
1-187	25	5	9			
1-188	32	7	22			
1-189	14	7	22			
1-190	13	6	28			
1-191	13	10	30			
1-192	13	5	23			
1-193	14	2	10			
1-194	70	27	44			
1-195	25	21	16			
1-196	37	27	7			
1-197	50	30	20			
1-198	13	5	8			
1-199	28	16	36	セクションに柱状が存在した痕跡有り	須恵器1片、上脚質上層5片(内1片は直)、 須恵器1片、須恵器2片、ナシ貝十個3片	-
1-200	44	31	55			-
1-201	26	13	13			-
1-202	17	8	10			
1-203	46	14	32		須恵十個1片、須恵器1片(空身紀W)	
1-204	16	4	5			
1-205	28	16	12			
1-206	36	14	11			
1-207	13	7	11			
1-208	42	16	25			
1-209	48	12	37		須恵土器2片、須恵器1片(丸山G)、上脚質上層2片	

ピット観察表(第2造構面)

ピット 番 号	上端 高 (cm)	下端 高 (cm)	深さ (cm)	崖土の特徴	地 上 中 生 物	備 考
2-01	25	10	25	セクションに柱状が存在した痕跡有り		
2-02	18	16	9			
2-03	33	24	17			
2-04	21	21	27			
2-05	39	10	30			
2-06	18	12	12			
2-07	35	17	22			
2-08	36	18	28			
2-09	20	10	12			
2-10	15	12	15			
2-11	75	17	58			
2-12	25	12	18			
2-13	30	29	29			
2-14	28	18	18			
2-15	36	23	22			
2-16	32	15	39			
2-17	23	14	22			
2-18	22	18	12			
2-19	18	11	9			
2-20	30	14	15			
2-21	29	13	8			
2-22	36	30	37		須恵土器もしくは上脚質6片	
2-23	17	25	15	セクションに柱状が存在した痕跡有り		
2-24	26	24	21			
2-25	26	10	36			
2-26	27	15	29		須恵土器もしくは上脚質3片	
2-27	25	14	34	セクションに柱状が存在した痕跡有り		
2-28	53	53	25			
2-29	25	16	25			
2-30	24	5	15	セクションに柱状が存在した痕跡有り		
2-31	22	15	8			
2-32	15	17	31			
2-33	20	16	29			
2-34	20	8	14			
2-35	24	20	13			
2-36	20	13	16			
2-37	28	10	18			
2-38	35	10	25			
2-39	35	29	34			
2-40	31	8	17			
2-41	22	15	30			

ピット 番号	上端径 (mm)	下端径 (mm)	高さ (mm)	現上の状態	浮きや沈き状態	直角
2-45	43	22	65		浮き±横4片(後端)	
2-45	18	16	15			
2-45	23	12	10			
2-45	14	7	9			
2-46	29	16	24			
2-47	15	5	15			
2-48	17	11	10	セクションに柱板が存在した前脚育り		
2-49	17	10	12	セクションに柱板が存在した奥脚育り		
2-50	24	10	31			
2-51	22	15	21	セクションに柱板が存在した前脚育り	黒墨若干片	
2-52	29	15	19			
2-53	55	10	18			
2-54	36	25	22			
2-55	56	10	11			
2-56	16	10	26			
2-57	17	7	26			
2-58	68	20	38			
2-59	38	20	73	セクションに柱板が存在した前脚育り		
2-60	27	11	13			
2-61	22	13	35			
2-62	29	15	7			
2-63	25	20	26			
2-64	23	20	21			
2-65	25	20	42			
2-66	22	8	37			
2-67	19	15	12		浮き±底もしくは土脚弱2片	
2-68	17	15	10			
2-69	25	20	22			
2-70	24	20	32			
2-71	26	10	55			
2-72	15	8	7			
2-73	26	15	13		浮き±底もしくは上脚弱2片	
2-74	21	11	23			
2-75	43	28	30	セクションに柱板が存在した前脚育り	浮き±底もしくは±脚弱1片	
2-76	10	17	12			
2-77	22	13	23			
2-78	41	28	28			
2-79	30	25	12			
2-80	33	19	16	セクションに柱板が存在した奥脚育り		
2-82	26	22	11			
2-83	38	91	54	セクションに柱板が存在した奥脚育り	浮き±底もしくは上脚弱1片	
2-84	29	15	29			
2-85	33	10	36	セクションに柱板が存在した前脚育り		
2-86	45	15	37			
2-87	28	18	21		浮き±底もしくは±脚弱6片	
2-88	25	15	28			
2-89	32	18	50			
2-90	23	20	18			
2-91	26	13	15			
2-92	23	10	25			
2-93	15	7	90			
2-94	25	13	26			
2-95	33	12	19	セクションに柱板が存在した奥脚育り		
2-96	15	6	17	セクションに柱板が存在した奥脚育り		
2-97	70	5	21			
2-98	10	9	19			
2-99	72	20	13			
2-100	35	15	12			
2-101	28	8	28			
2-102	37	35	6			
2-103	36	12	22	セクションに柱板が存在した奥脚育り	浮き±底もしくは±脚弱1片	
2-104	25	10	13	セクションに柱板が存在した奥脚育り		
2-105	15	6	5			
2-106	50	48	14			
2-107	12	5	16			
2-108	27	19	24		↑脚弱8片	
2-109	30	26	16		※底弱6片、上脚弱1脚弱5片、浮き±底もしくは±脚弱6片	
2-110	75	15	33			
2-111	56	5	23	セクションに柱板が存在した奥脚育り		
2-112	23	14	10			
2-113	36	7	13	セクションに柱板が存在した奥脚育り	浮き±底もしくは±脚弱2片	
2-114	25	10	33			
2-115	20	12	9			
2-116	18	12	25			
2-117	13	8	19			
2-118	19	10	39			
2-119	41	58	21			
2-120	37	10	28			
2-121	16	7	21			
2-122	18	11	24			
2-123	19	9	18			
2-124	19	16	3			
2-125	18	19	8			
2-126	13	5	9			

ピット 番号	上耕深 (cm)	下耕深 (cm)	耕元 (cm)	種子の特徴	遺土巾田土・漬物	備考
2-127	14	8	10			
2-128	27	15	24			
2-129	15	5	36			
2-130	33	27	17			
2-131	26	9	82			
2-132	24	22	30			
2-133	17	10	33			
2-134	49	8	27			
2-135	79	10	33			
2-136	48	10	3			
2-137	43	4	36			
2-138	54	12	16			
2-139	20	5	31			
2-140	10	3	9			
2-141	20	11	14			
2-142	25	17	18			
2-143	19	8	13			
2-144	34	21	17			
2-145	30	5	28			
2-146	38	18	12			
2-147	22	10	11			
2-148	14	8	26			
2-149	25	10	21			
2-150	18	10	8	セクションに柱脚が存在した痕跡有り		
2-151	29	9	44			
2-152	33	8	23			
2-153	26	7	37			
2-154	18	10	7			
2-155	25	15	18			
2-156	28	31	12			
2-157	45	5	36			
2-158	31	22	22			
2-159	20	9	16	セクションに柱脚が存在した痕跡有り		
2-160	22	18	21			
2-161	49	11	31			
2-162	32	19	52			
2-163	35	30	64			
2-164	28	11	52			
2-165	30	15	24			
2-166	32	25	11	発牛十箇もしくは土器部6片		
2-167	40	5	19			
2-168	59	15	46			
2-169	33	20	33			
2-170	30	24	22	発牛上層3片(後期)		
2-171	71	15	29			
2-172	18	5	7			
2-173	15	6	78			
2-174	37	12	25			
2-175	58	10	15			
2-176	22	20	28	発牛上層もしくは土器部2片		
2-177	30	25	22	十箇もしくは土器部1片		
2-178	72	10	19			
2-179	28	24	11			
2-180	20	26	28			
2-181	40	30	14			

### 遺物観察表(土器)

測定(分) 備考	器種	器種	寸法(cm)	施上	施底	内調	剖量等	成存波	備考
6-1	発牛上層	甕	口径:15.0 底径:11.0(cm)	1mm鈎の石高・長粒粘 多少含む	底	内面:外筋:凸輪角 底面:底面	内面:強化 外面:強化	白堀部全周のみ	
6-2	発牛上層	甕	口径:15.4(底) 底径:11.0(cm)	1mm鈎の石高・長粒 粘を多く含む	底	内面:海褐色(底に点状 浮出・薄青色斑あり) 底面:底面	内面:強化 外面:ココナツ	約1/10程度 (加より後後期)	水たまりに 伏している
6-3	上鉢器	甕	口径:14.8(底) 底径:11.0(cm)	1mm鈎の石高・長粒粘 少々含む	底	内面:外筋 底面:底面	口縁部:強化(底面剥離等 見られ、表はこくと底部が厚い) 内面:底	約1/6弱	
6-4	瓦窯	瓦	瓦径:8.9(縦) 横:8.0(cm)	瓦片・云石片を若干 含む	瓦	内面:凸輪角 底面:底面	内面:強化 外面:強化	約1/6弱	
6-5	十箇器	皿	横内部径:4.2	上鉢器の石高粘をわ ずかに含む	皿	内面:外筋	内面:強化 外筋:底面	白堀部のみ全周 底部と斜筋部は黒	
6-6	酒器類	器台付耳	底径:7.6(縦) 横:7.0(cm)	上鉢器の石高粘をわ ずかに含む	皿	内面:外筋	内面:内筋 外筋:底面	底部周辺約1/6弱	ろくろ右回転
6-7	十箇器十指	耳	高径:1.7	上鉢器の石高粘をわ ずかに含む	耳	内面:凸輪角 底面:底面	内面:強化 外筋:底面	内筋部:内筋 外筋:底面	底部のみ光沢
7-1	製造器	甕	底径:8.0(縦)		甕	内面:底面	製造部:内筋:凸輪 外筋:底面	内筋部:内筋 外筋:底面	
7-2	製造器	造形底部	底径:7.5(縦) 高径:5.0(cm)	底面、表面風化を若干 含む(やや 粉さ)	底面	内面:外筋	内面:強化 外筋:底面	約1/3弱程度	ろくろ右回転
7-3	中世土師器	柱状高台	底径:6.7	長石・長粒粘を若干含 む	底	内面:底面	内面:強化 外筋:底面	内筋部:内筋 外筋:底面	内筋部部分全周

巡回番号	種類	品種	寸法(cm)	地土	地成	色調	病害等	残存率	備考
7-4	白磁	鏡	底径:2.6(都)	絶版	良	内面:白磁 外面:上方のみ白磁、下方、 高台部は地色 裏面:灰白色	背面:白磁 背面:カズリ	約8/10程度	ろくろ右回転
8-1	角挽器	研	口径:11.8(都) 底径:11.5(都) 高さ:3.9	絶版	不良	内面、外面、断面:灰黑色	内面:退化、表面粗塵 外面:表面粗塵 断面:白磁	約1/2弱	
8-2	簞山器	硯	口径:11.7(都) 底径:10.5(都) 高さ:3.6	石英、長石微粒を少々 含む	良	内面、外面、断面:灰黑色	内面:表面粗塵 外面:表面粗塵 断面:白磁	約1/4弱 口径:1/10程度	
8-3	筆立器	硯	口径:16.0 底径:15 高さ:3.5	墨	やや乾燥	内面、外面:白磁色	内面:赤く四隅トテ 表面時にケズられる 外面:表面粗塵 断面:白磁 裏面:ナダ	墨面が約1/2程度	
8-4	簞山器	硯台付	口径:15.9(都) 底径:15.1(都) 高さ:1.9	長石微粒を多く含む 硯	良好	内面、外面:灰黑色 裏面:灰白色	内面:表面粗塵 外面:表面粗塵 断面:白磁	墨面が約1/4程度	
8-5	土笛筒十郎	研	直径:5.5(都)	絶版	やや乾燥	内面:地紋化 外面:地紋化 裏面:灰色	内面:退化 外面:退化	直部:約1/3弱 がり上りは無	
8-6	土笛筒十郎	墨	底径:6.2(都)	絶版	悪い	内面:墨色 外面:墨色 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化	近部が約1/4開隙	
8-7	土御供土器	墨	口径:13.3(都)	石英、長石微粒を少々 含む	良	内面:灰黑色 外面:灰黑色 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 断面:墨色	底部が約1/3弱	
8-8	土笛筒十郎	硯台付	直径:3.7	鉛鉄、幾少砂粒を若干 含む	不良	内面:表面粗塵 外面:表面粗塵 裏面:三色	内面:退化 外面:退化 裏面:白	高台部のみ	
8-9	簞山器上器	硯		石英、長石微粒を少々 含む	良好	内面:灰黑色 外面:灰黑色 裏面:灰白色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	墨のとおり 側面に落書き 片ももう一片あり
8-10	陶器	墨		絶版	良好	内面:墨色 外面:墨色 裏面:灰白色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	ふかん区のこおり	
9-1	瀬山器	平底(大型)	製造最大径:26.0(都)	1mm粒の石英粉を多 く含む	良好	内面:灰黑色 外面:灰黑色 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨が約1/10程 度
9-2	白磁	硯		絶版	墨	内面:白色 外面:白色 裏面:墨色	内面:白色 外面:白色 裏面:墨色	墨面が約1/4程度	
9-3	(石製品)	用途不明	厚径:3.1 底径:2.9(都) 高さ:37.0(都)	石材不明	石材不明	内面:白色 外面:白色 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	墨面が丁寧な上り 上の端部に他の墨とり 化粧用の墨が付いて いた	
10-1	原幕器	硯		絶版	良好	内面:白色 外面:白色 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨が約1/2程度
10-2	原幕器	硯	原幕器大径:11.0(都)	鉛鉄、墨を含む	やや乾燥	内面:表面粗塵 外面:表面粗塵 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨が約1/2程度
10-3	原幕器	硯	底径:5.8(都)	長石微粒を多く含む	やや乾燥 透光して いる	内面:透明感 外面:明暗感 裏面:透明感	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨が約1/2程度
11-1	牛牛子器	硯		上部前部の石英、長石 微粒を多く含む	良	内面:墨色 外面:墨色 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨が3×3 cm 程度
11-2	牛牛子器	硯		上部前部の石英、長石 微粒を多く含む	悪い	内面:墨色 外面:墨色 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨が3×3 cm 程度
11-3	上神器	硯	口径:11.6 底径:11.5	鉛鉄、長石微粒を多く 含む	良好	内面:墨色 外面:墨色 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨が3×6 cm 程度
11-4	七輪器	硯		石英、長石微粒を多く 含む	良好	内面:墨色 外面:墨色 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨が2×1.5cm 程度
11-5	牛牛子器	底板	くびれ部径:3.1	石英、長石微粒を多く含 む	やや乾燥	内面:墨色 外面:墨色 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化	内面:墨が約1周
11-6	牛牛子器	外杯の都器	直径:12.8(都)	長石微粒を多く含む	やや乾燥	内面:墨色 外面:墨色 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨が約1周
11-7	上神器	高坪器		1mm粒の石英、石英粉 を多く含む	良好	内面:墨色 外面:墨色 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	墨のとおり
11-8	七輪器	小望丸底板	口径:12.9(都) 底径:12.5(都)	1mm粒の石英、長石 微粒を多く含む	良	内面:墨色 外面:墨色 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨が約1周
11-9	上神器	小望丸底板	口径:5.5(都)	石英、長石微粒を多く 含む	良	内面:墨色 外面:墨色 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨が約1周
11-10	牛牛子器	把手	直径:12.3×1.1	石英、奥石の微粒を含 む	良	内面:墨色 外面:墨色 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨がとおり
12-1	七輪器	高坪の都器	口径:12.5(都) 底径:12.1 高さ:3.9	石英、奥石の微粒を含 む	良好	内面:白色 外面:白色 裏面:白色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨が約1周
12-2	簞山器	硯	口径:12.5(都) 底径:12.1 高さ:3.9	石英、奥石の微粒を含 む	良	内面:白色 外面:白色 裏面:白色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨が約1周
12-3	酒魚器	高台付瓶	底径:9.0	石英、長石微粒を多く 含む	良好	内面、外面、断面:灰色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨が約1周
12-4	原幕器	高台付瓶	底径:8.8	絶版	良好	内面、外面、断面:灰色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:墨色	内面:墨が約1周
12-5	中華土器器	社狀灰瓦	底径:5.6	絶版	悪い	内面、外面、断面:白色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:白色	内面:墨化 外面:墨化 裏面:白色	内面:墨が約1周

### 遺物觀察表(石器)

持田番号	種類	寸法(㎜)			重量(g)	石材	備考
		長さ	幅	厚さ			
G-8	スクレイパー	6.6	6.7	0.6	32.9	玄武岩	
11-13	スクレイパー	2.1	3.0	0.6	5.8	黒雲石	後存状況: 安部 既設の内蔵版に、片面からのみ斜削削面を施している。
11-11	直石	5.9(既設版)	3.3	1.2	82.2		上下面を火鉄
11-12	棒状詰石	7.7	2.95	0.6	76.8		
18-6	鉢石	10.6	8.5	3.6	263		明面上の凹痕等はありませんが背面ではない。使用周囲が豊かたか
29-8	石皿	14.7	12.5	7.4	1,610	玄武岩	透けの色々とく有り
23-13	スクレイパー(既設)	3.3	4.4	0.6			裏面との接觸面の毛目感が
30	鉢石	11.7	8.0	3.8	561		

# 図版



作業風景



戸崎遺跡遠景（南東より）



戸崎遺跡調査前近景（南西より）



第1遺構面平面プラン検出状況（南西より）



第1遺構面完堀状況（北より）



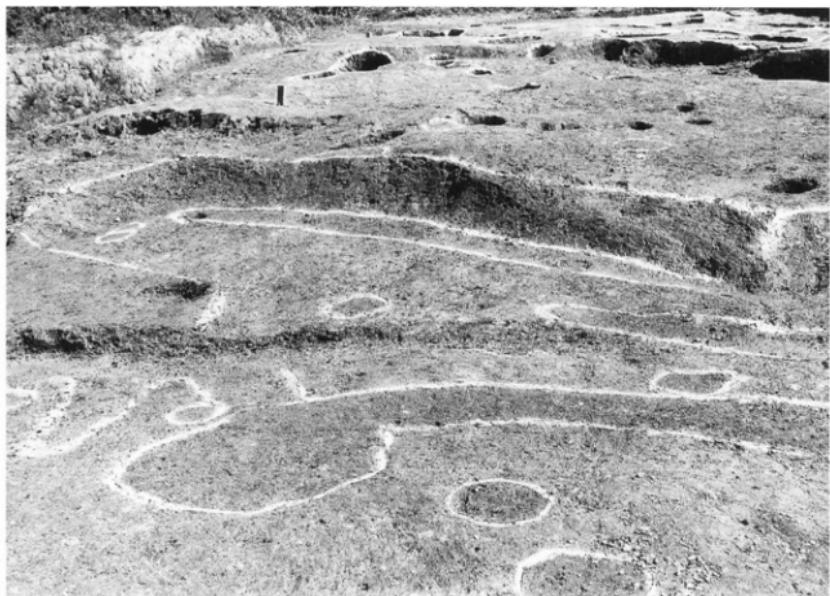
第1 遺構面の土坑群



第1 遺構面ピット P 1-175



第2遺構面平面プラン検出状況



加工段2-01と周辺の平面プラン検出状況



加工段 2-01 と周辺造構完掘状況

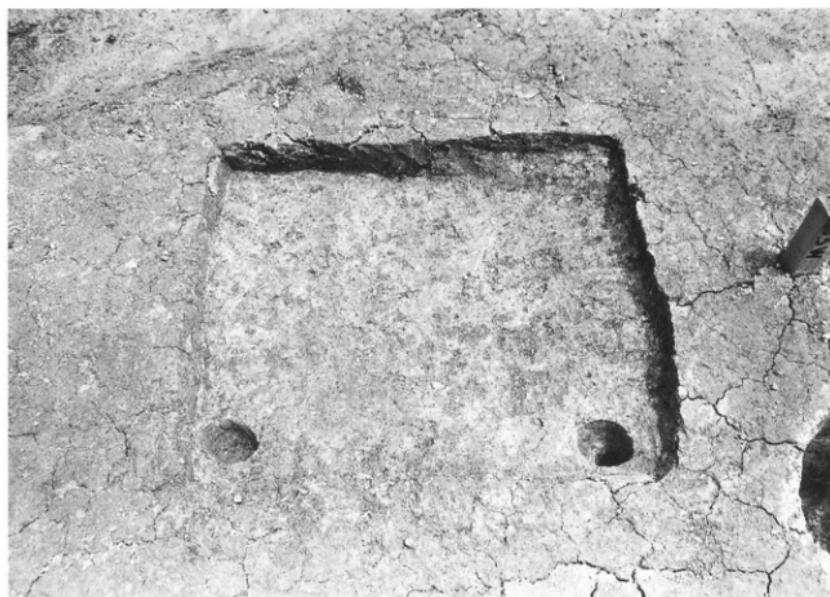


溝SD 2-01 と溝SD 2-02 完掘状況

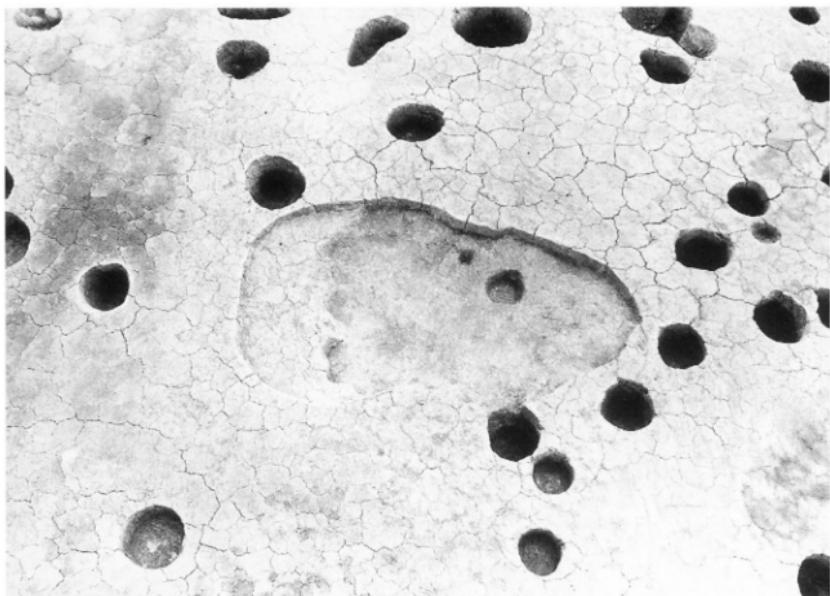
图版6



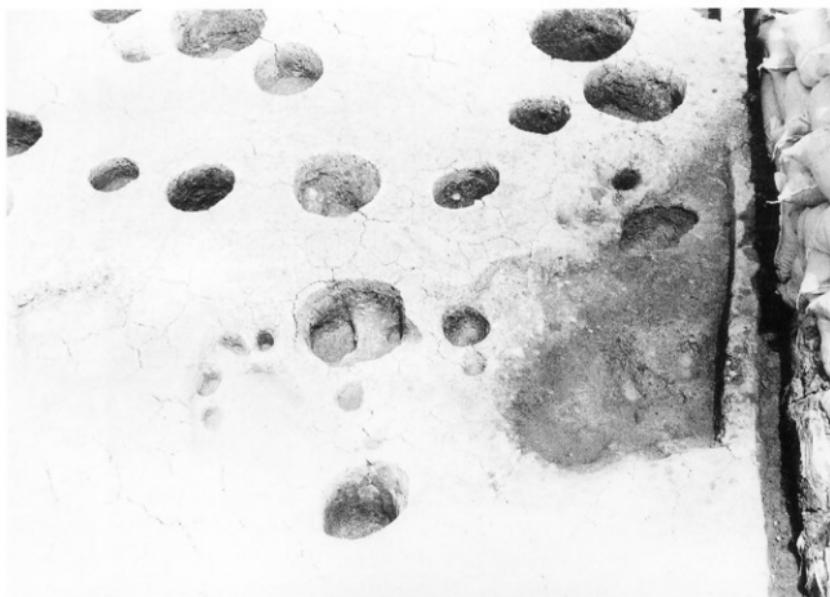
土坑SK 2-01遗物出土状况



土坑SK 2-01完掘状况

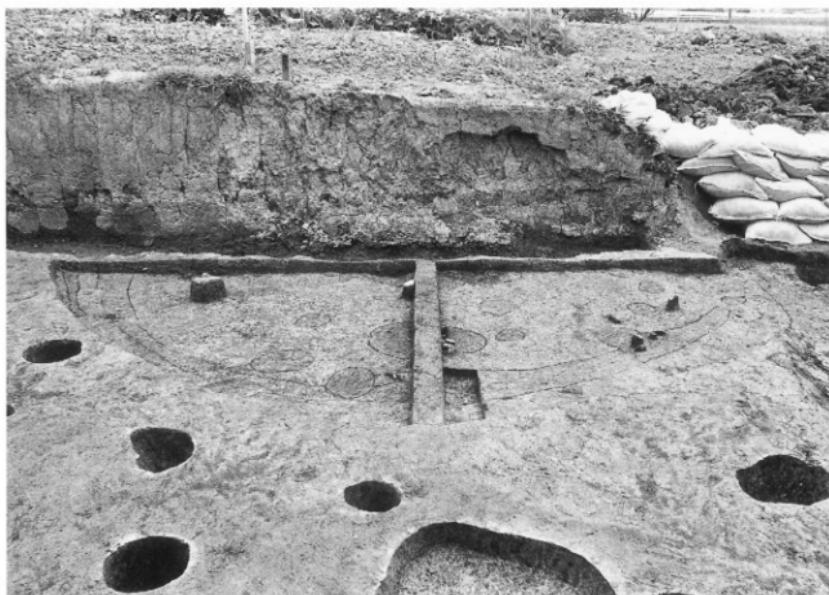


土坑SK 2-02完掘状況



性格不明の遺構SX 2-01完掘状況

図版 8



竪穴住居跡 2-01平面プラン検出状況



竪穴住居跡 2-02セクション



竪穴住居跡SI 2-01小壺出土状況



竪穴住居跡 2-01完掘状況



第2構造面P 2-167発出土状況



東壁セクション全景



東壁セクション北側（部分）



東壁セクション南側（部分）



第2遺構面完掘状況（北より）



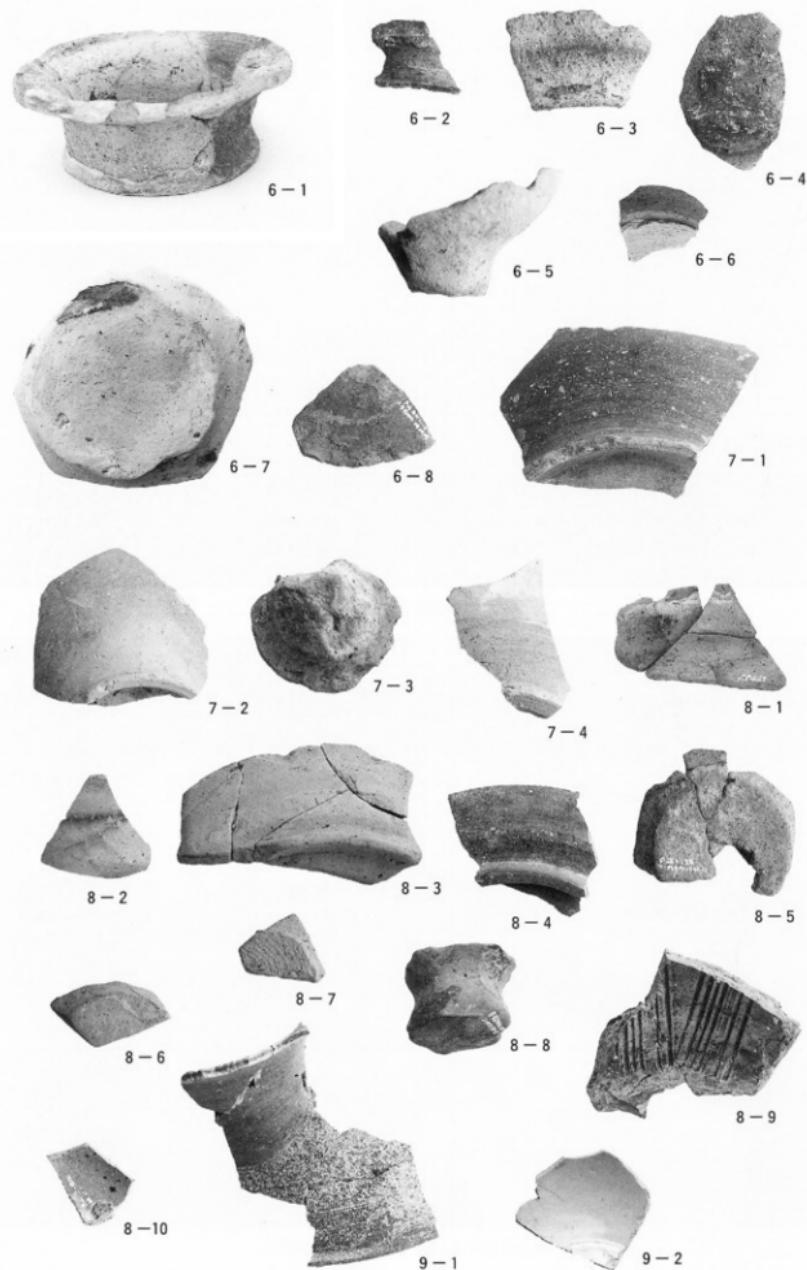
第2遺構面完掘状況（南より）



調査終了後全景

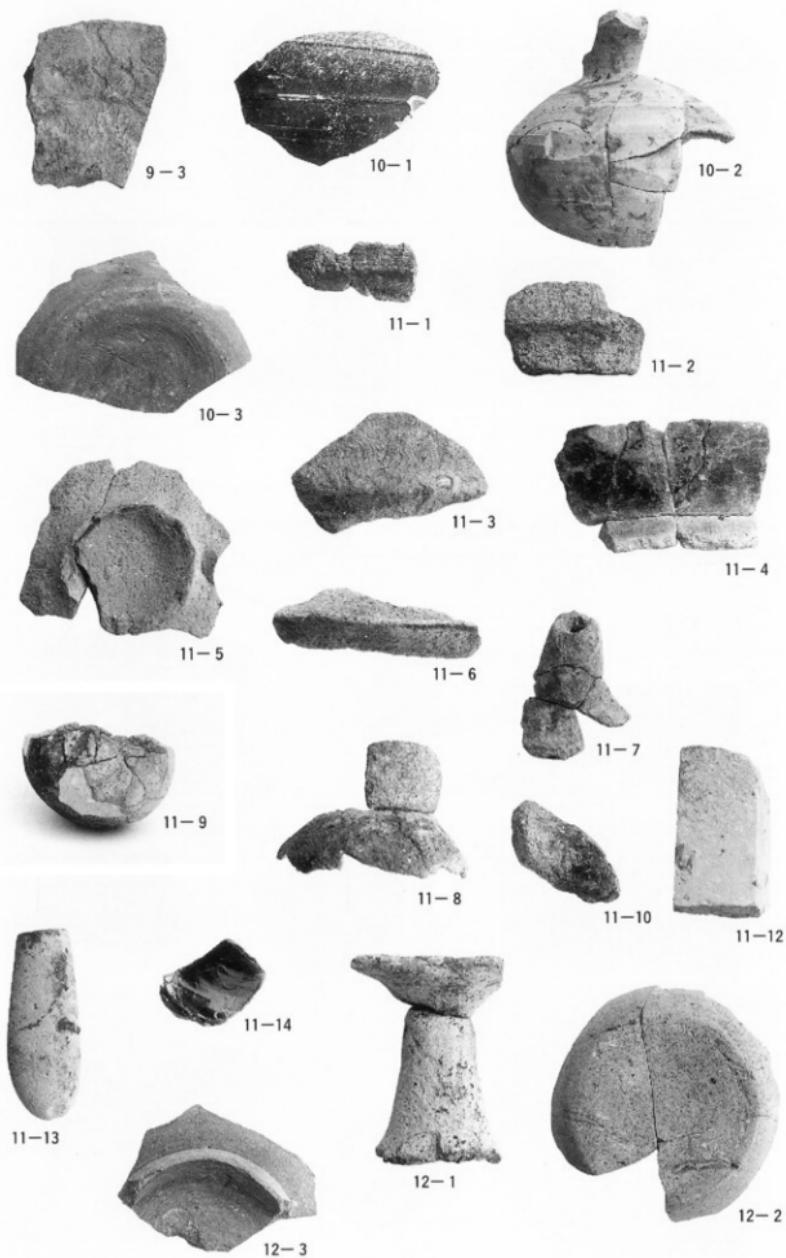


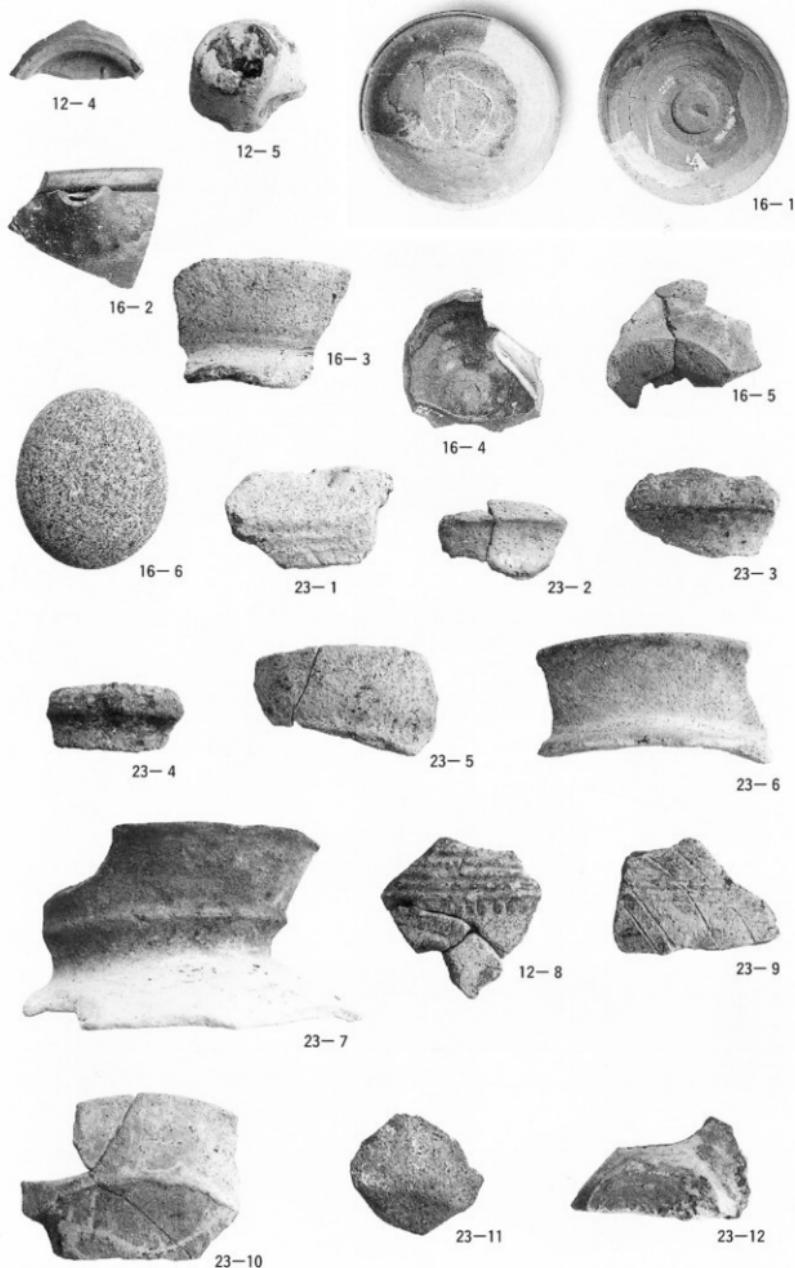
地元の人々を対象とした遺跡の説明会

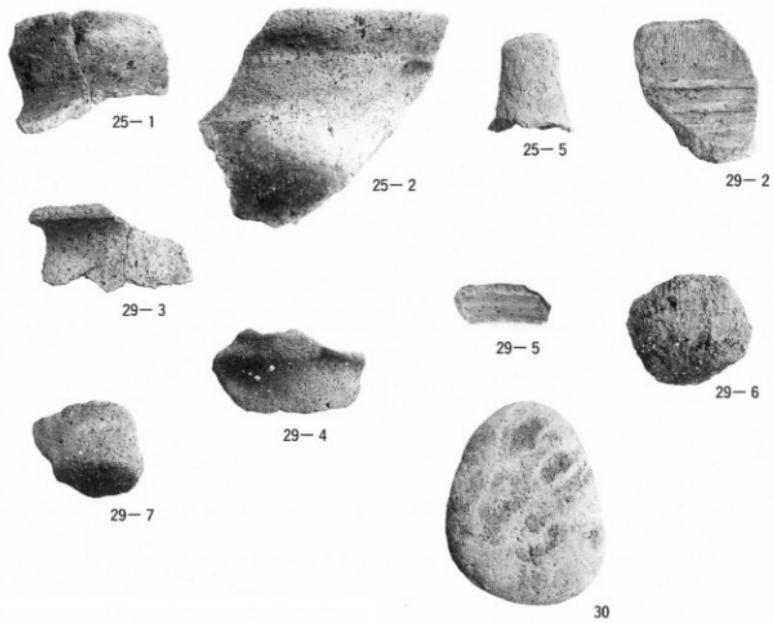


出土遗物

(数字は挿図番号を示す)







# 報告書抄録

ふりがな	へいせい20ねんどのまちくためいけとうせいびじぎょうにともなうとさきいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成20年度野間地区ため池等整備事業に伴う戸崎遺跡発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	松江市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第116集							
編著者名	江川 幸子							
編集機関	松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団							
所在地	〒690-8540 島根県松江市末次町86番地 電話: 0852-55-5284 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1 電話: 0852-85-9210							
発行年月日	2008年10月31日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
戸崎遺跡	島根県 松江市 上佐陀町 529番2 530番 531番	市町村 32201	遺跡番号 D-0154	35° 30' 19"	133° 0' 24"	20080601 20080725	290m <sup>2</sup>	ため池整備
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
戸崎遺跡	散布地 集落跡	弥生・古墳 中・近世		ピット 土坑 堅穴住居跡	弥生土器 土師器 須恵器 土師質土器 陶磁器 石器		遺構面2面有り	

松江市文化財調査報告書 第116集  
平成20年度野間地区ため池等整備事業に伴う  
**戸崎遺跡発掘調査報告書**

平成20年10月31日

発行 松江市教育委員会  
島根県松江市末次町80番地  
財団法人松江市教育文化振興事業団  
島根県松江市西津田6-5-44

印刷 有限会社 黒潮社  
島根県松江市向島町182-3